

第5回 おかや演劇祭上演台本

絲まち パラダイス

〈ある、小さな製糸工場の物語〉

監修・大橋泰彦（劇団離風霊船）

作・おかや演劇祭実行委員会

(キャスト)

【語り】

老婆

【ヤマネ製糸】

親方

おかみさん

お里

浅倉

アキ

工場長

田中

三助

圭吉けいきち

地元の工女

よね

いち

うめ

県外の工女

キク

マスエ

ハル

【警官】

警部

巡査

警官隊

【養蚕農家】

地主

文太

よし

【ボイラー屋】

大将

従1

従2

【酔っ払い】

アニキ

コブン

祭のヤジ馬 でられる人

【飛驒の家族】

父

母

長男

嫁

×次男 独身。シベリア出兵。(二十二才)

×長女 嫁に行っている。(二十才)

三男 圭吉。ヤマネ製糸 小口千賀

四男

アキ

五男

一幕一場「飛驒の工女たち」

一人の老婆。

老婆 時は大正時代。まだ、ラジオもテレビもない時代でございます。岡谷

は当時、平野村と申しまして、巨大な製糸工場が立ち並ぶ町でした。

老婆 製糸工場へ働きに行くことを「キカイに行く」とか「キカイをやる」

と申しまして。わたくしのような飛驒の方から来た者は、それが少しなまったのでしょうか「キカイに行く」などと言っていましたね。

老婆 私が住んでいたのは、飛驒の西側の村で、高山まで、歩いて一日ほどの距離でしたでしょうか。あまり作物も採れない、貧乏な村でした。

老婆 飛驒からは「野麦峠」を越えて岡谷までまいりました。クマザサがおいしげる細々とした小道でした。雪を踏みしめ踏みしめ、ほんとう

に大変な思いをいたしましたよ。

緞帳アップ。上手、炊事場で母親（鮎沢シズ四十七才）が夕食の用意をしている。

土間で父（鮎沢源次郎五十才）が藁打ちをしている。

（鮎沢アキ十三才）は、そのお手伝い。

老婆

2月ともなると、糸取りに出る娘のいる家は大騒ぎで、ご馳走してくれたり、ねぎらったり。そりゃもうお祭りのようでした。

外から子供の声が聞える。当時の流行り歌。「広瀬中佐」演奏なし

轟く砲音 飛び来る弾丸

荒波洗う テッキの上に

闇を貫く 中佐の叫び

「杉野は何処 杉野は居ずや」

下手から四男（鮎沢四郎十五才）と五男（鮎沢五介八才）が外から帰って来る。わら靴の雪を土間で落しながら。二人は兵隊ごっこをしている。兄は兵隊、末っ子の弟は隊長らしい。

四男 隊長どの、基地に帰りましたぞ。

五男 うん、ごくろう。

母 お帰り。寒かったろう。

五男 点呼を取る。いち！

四男 にい！

父親 さん。（ノリで）

アキ ……しい。（やむを得ず）

四男 異常ありません。

五男 （笑顔）けっこつ。

母 また、兵隊ごっこか。味噌はもらえたか？

四男 はっ、無事ちようだいして参りました。

五男 これであります。

五男、小さな包みを母親に渡す。母はそれを受取り拝むように。

母 地主さん、ありがとうございます。

四男 任務完了！

五男 隊長お腹が空きました。

四男 おっかあ、今晚の夕食は何でありますか！

母 今日はブリ汁だよ。

五男 やったあ、ご馳走じゃ。

母 隊長どの。お茶わんを運んでください。

五男 わかりましたであります。

五男、茶わんをまるで行進のように。

五男 いち、にい。いち、にい。

四男は父が羹打ちしてる姿を見て。

四男 おっとう、手伝うよ。

父 手は足りてる！（アキに）アキが手伝ってくれてるもんな。

アキ うん。

父 おまえは飯の支度でもしてろ！

四男 なっ、何でアキが羹打ちして、俺が、飯の支度？

父 ほれ、隊長。

五男 二等兵、こつちを手伝え。

四男 何だそれ。

五男 集合！

四男 ……はいはい。

父 アキは、本当に手が器用だ。

アキ ほんとうか？

父 ああ、誰に似たのかなあ。

母 わしじゃろう。

父 ちがう！バカタレおれだ！アキはおっとうに似たんだよなあ。

アキ うっとうん。

母 アキ姉ちゃんは、明日キカヤに糸取りに行くだでな。

父 ……。（シヨック）

五男 キカヤに？

アキ うん。

五男 おらも行ってえ。

母 はは、あんたは男だろ。

五男 （父に）男じゃだめか？

父 いいんじゃねえか。

母 おっとうん！

そこに、長男の嫁（時子二十四才）。洗った野菜を抱えて入って来る。

嫁 ふっ、寒い寒い。

五男　なあ、時子姉さん。男は糸取りになれねえのか？

嫁　糸取り？五介さんがか？そりや無理だな。

五男　なんで？

嫁　なんでって、生糸は女子の手でとらにやあ。

五男　おっとつ、そういうもんか？

母　おっとつに聞くな！

父　・・・。

四男　兄さが、キカヤに行つてるじゃねえか。

母　圭吉は、検番見習いだ。

アキ　おつかあも、昔はキカヤに行つてただよね。

母　源太が生まれる前にな。

五男　大つきい兄ちゃんが？

母　そつじゃ。

四男・五男　へえ。

嫁、切つた野菜を座敷に。四郎、ナベのフタをとり、入れる。

母　エントツちゆうもんがいつぱい立つとつてな。

嫁　それも百や二百じゃないよ。「諏訪千本」っていつてな。モクモク

と黒いけぶりが朝から晩まで出てくるだよ。

五男　エントツか。すげえな。

嫁　こちらへんのもんはみんな行つてただよ。

その時、長男（鮎沢源太二十八才）が帰ってくる。

長男　また、降りだして来たな。

土間で藁のケサを脱ぎ、雪を払う。嫁がそれを手伝う。

長男　ただいま。

嫁　遅かつたなあ。

長男　おらがいなくて寂しかったけえ？

嫁　うんにや、そんなこたあねえだ。

長男　おらあ寂しかったぞ。

嫁　ちよつとでかけたただじゃろつ。

長男　こんどは一緒に行くだてな。

嫁　おてて繋いでか？

長男　そりやいいな。ははは。

一同、見ている。

長男 なんだよ。

一同、目をそらす。

嫁 いやだ。

長男 ほれ、おつとつ、酒だ。今日くれえいだろつ。

父 だれが飲みてえだか。

藁打ちをやめて、着物のホコリを払う父とアキ。

アキ ほど良いお燗がついたな。

父 ははは、おまえうまいこと言うな。

母 アキ、くだらんこと言っていないで、こつちへ来い。

アキ はい。

父とアキ座敷に座って。

父 おお、うまそうなブリ汁じゃ。なあ、アキ。

アキ うん。

長男 アキ、おら家のお蚕さまも、キカヤに行ってるだぞ。

アキ ほんとか？

長男 まあ、あんまし、いいお蚕さまじゃねえから、間引いて持ってくだけんど。ほれ、おつとつ。

長男、父にお酌 アキ、浮かない顔をしている。

父 なんだ、アキ。具合でも悪いいか？

アキ ほんなこたあねえ。

父 どれ。

父はアキのおでこに手を当て、

父 (わざとらしく) ああ。こりゃ熱があるな。

母 えっ、風邪でもひいたか？

父 こりゃだめだ。こりゃいかん。アキ明日はやめとけ。

一同 ええ？

母は慌ててアキのオデコに自分のオデコを合せる。

母 ……何でもねえよ。

父 雪も降り出したみてえだし。こりゃ明日はムリだ。

長男 大したこたあねえよ。すぐやむら。

母 おつとつ。

父 ……なんだ。

母 もしかして、アキをキカヤにやるのが嫌になっただな。

父 おらあは最初から反対してただ。

一同 はっ？

父、アキの方に向き直って。

父 アキ。

アキ はい。

父 おめえは、本当にキカヤに行きてえだが。

アキ ……。

父 やなら、やめたっていいだぞ。

嫁 今さらそんな…。

長男 ほつだよ。ヤマネ製糸から、前金^{まえがね}までもらってるだに。

母 源太！

長男、まずいことを言ったと反省。

父 姉ちゃんも、ちつちえ兄ちゃんもきつと反対する。

母 源二はシベリアだし、春子は嫁に行ったしな。

父 いたらの話しだ！

五男 おら、シベリア行きてえ。兵隊になりてえだ。

父 バカ野郎（頭をペシ）

四男 おつとつ！

母 何するだ。

五男 うええええん。

父 この親不孝もんが…。

アキ おつとつ、心配するな。おら、キカヤに行きてえだ。

一同 ……。

アキ ほんとだよ。

父 ……。

母 （ナベのフタを取って）もう、煮えたな。

母、お椀にブリ汁を盛りつけて。

父 どれ。（アキのお椀を受け取って）フーフー。

アキ おっとつ、いいよ。子供じゃねえんだから。

アキ、お椀をもらって。

父 どうだ？うめえか？

アキ、飲む。

アキ うん。うめえ。

父は、それを見てちょっとウルウル。立って土間の方へ行く。

母 忙しい人じゃのう。

父、桶の水で顔を洗う。

長男 おっとつはせつねえ（悲しい）だ。

嫁 アキちゃんは末っ子だでな。

五男 末っ子はおらだ。

四男 おめえは男だ。

五男 ……損だなああ、男って。

嫁 ヤマネ製糸にあけい圭吉兄さんがいる。心配ないよ。

アキ うん。

アキ、兄にお酌をしながら。

アキ みんな、そんなに心配するな。すぐに優等士女になって帰ってくるで

な。

一同 ……。

アキ 五介。姉ちゃんは、明日、キカヤに行くからね。

五男 うん。

アキ みんなの言うこと良く聞くんだよ。

五男 うん。

アキ ほれ、たんと食べる。

アキ、五男に盛ってやる。父、土間の作業場から、藁長靴を一足持って来る。

父 これ持ってけ。

アキ えっ。

父 野麦越えはつれえぞ。

アキ うん。

アキ、父にもらった藁の長靴を抱きしめる。

老婆がその様子を見ていた。

老婆 どんな親でも我が子と離ればなれになるのは辛いもの。それが生きる

ため、前金を返すということであれば、身を切る思いだったに違いありません。それは、子供とて同じこと。

野麦峠も辛うろつございましたが、親の顔を思い浮かべては何度枕をぬらしたかわかりません。

老婆 でも、今でも思い出すのは、糸ひきの時代。わたくしにとっては何と

ても懐かしい、良い時代でした。

転換

一幕二場 「操糸場の工女たち」

ステージング（生演奏）

工女や検番、繭運びたち。

タイトル「募いして」

作詞 「山上宮坂製糸社歌より」

作曲 「ミニマックス・市川さつき」

歌唱・振付 「両角由香」

無機質な機械や蒸気の音。工場にやってきて仕事の準備をする工女。繭運び達も、黙々と繭を運んでいる。クルクルとまわる木杵。その音がやがてリズムとなりコーラスとなる。

つのいして おとめ いとをとる

はるまだあさき かいぎように

ゆきのゆうべや しものあさ

たがいにきせい つとめつつ

皆それぞれ姉さん被り、着物姿。（エプロンや前掛けを付けている。人それぞれ）年齢は十二才から三十才。追加する繭を桶に入れ、それを運ぶ男（三助と圭吉）。大きな声を出して指示を与えたり、ダメな糸を発見したりする男（田中）。

皆それぞれが、自分の仕事をこなす。

にっしんげつぼの ぶんかにも

おくれはとらじ もろともに

つとめて はげみて こうじょうに

つくすぞ やがて くにのため

（名前の平仮名は地元。カタカナは県外から来た工女さん）

マスエ ちょっと、繭が足りないよ。

キク こっちも早く持ってきて！

三助 は、はい。

キク 張り切っているじゃない。

マスエ 何言っているの。アタシヤ、いつもこうだよ。

ハル 怪しいなあ

よね あのお、浅倉さん、機械の調子がおかしいんだけど。

浅倉 ああ。

浅倉、よねの座繰の様子を見に来る。皆、浅倉が気になる。

浅倉は一見ガラの悪い風体。しかし、物事を器用にこなす。まだ検番の経験の浅い男だが、その男気で人気がある。

浅倉 ああ、確かに軸の回転がおかしいなあ。

よね そうなんです。さつきからうまく糸が取れなくてえ。

浅倉 ああ、ちよつと、待っててくれ。

よね ハイ

いち 浅倉さん、アタシの方も見てくんねえか？

キク アタシのもだ！

対応しきれない浅倉。そこへ上検番の田中やってくる。

田中 よし、オレも見るぞ。

いち あ、直った。

キク わたしも直った。

田中 コラー！！

三助 はい。繭。

マスエ あつ、ありがとつ。

三助とマスエ、ニコニコ見つめ合ったりして。

二つのグループ、地元組と県外組。県外組は別の話して盛り上がっている。

キク ねえ、何かいいことでもあった？

マスエ 別に

ハル ねえねえ、何の話？

キク この前、出店の通り、男の人と歩いてるの見ちゃったんだよね。

マスエ ！！

三助 ！！

ハル え、え、姉さんが？

マスエ ちよつと、活弁に誘われたただけだ。(活弁無声映画)

ハル キャー

キク ハルちゃん！アタシ達も活弁、観に行くよ！！

ハル はい！

マスエ ちよ、ちよつと！！

浅倉、座繰の調整が終わる。

浅倉 これで大丈夫だ。ちょっと確認してもらえますか？

よね、作業を再開してみる。

よね あ、前よりいい感じ。ありがとう

浅倉 それじゃ。

浅倉、その場を離れる。よね、いつまでも浅倉を見送る。

キク いつまでボーっとしてるだ！

よね (ヨダレ) おっといけねえ。

いち 早く仕事に戻ってよ。

よね ハイハイ。

遠くでサイレンの音。おかみ、食事の準備が出来たので呼びに来る。

おかみ 昼飯の支度が出来たよ。

工女達 メシだ！

工女たち、休憩に入るため席を立とうとする。

田中 ちょっと待ってください。

一同 えっ！

田中 昼飯の前に連絡があります。

ハル 何ですか？時間がなくなっちゃうんですけれど。

田中 みんなもつと糸の太さに集中してくれないかな。

いち なんです？ せっかく調子が出てきたに。

田中 シロウトか！ 糸の太さが指定より細いんだよ。このままじゃ、罰金くれるぞ。

工女達 ええ！

田中 おめえたちも、少しはお里を見習え。

知らん顔するお里。

田中 繭にはいろんなクセがある。糸が細くなったら厚手の繭。太くなったら薄手の繭。なんでおめえたちは、そんなことができねえんだ！

うめ なんてってねえ

マスエ ねえ

三助 ねえ

いち しょうがないよねえ

キク ねえ

工女たち全員 ねえええええ！

田中 ……こんな時だけ団結しやがって。ほら、この子の糸を見る！

一同 えっ？

田中 アキは今年初めて来た新工だぞ。この子の糸は完べきだ！

よね うそ！

田中、アキの取った糸を工女たちに見せる。

いち ほんとうだ。

マスエ あんた器用ね。

よね ちゃんと教えたとおりやってるじゃない。

キク えっ、教えたのわたしでしょ。

うめ あんたこの子と話したことあるの？

ハル 糸取り教えたのわたしよ。ねっ。

アキ ……はい。

田中 教えたんならちゃんとやろうよ。何でこの子に負けちゃうの。

ハル あっちが挑発的に作業を早めるから。

よね 私たちが全部悪いみたいじゃない。

キク そうでしょ！いつも色目ばかり使って！

よね いつ使ったのよ。

田中 オレは、使われてないぞー

三助 おらあちよつと感じる。

田中 なに！

マスエ いやだあ。

うめ 知らないと思ってるの？

ハル あんたの機械、毎日調子悪いみたいだけど。

キク そうそう、その度、浅倉さん呼びつけてさ。

田中 オレだって機械なおせるぞー

よね だって調子悪いんだからしょうがないでしょ。

キク いつも浅倉さんのことばかり考えているんでしょ

よね 何ですって~~~~~

三助 仕事終わったら会う？

マスエ 会う会う。

よね、キクへ飛びかかる。工女達、入り乱れてケンカを始める。

田中 おい、やめないか！

工女達 うるさい！

キク だいたい、品質管理は、アンタの責任でしょ！

よね 人に罰金くれる前に、

一同 自分に罰金くれな！

田中 何だど~~~~~

今度は、工女たちと検番がいがみ合う。浅倉、見かねて。

浅倉 田中さん、工場長が呼んでいましたよ

田中 ああ？（状況に気づいて）ああ、そうか。じゃ、浅倉あとは頼んだ。

田中は先輩の検番だが、何故か浅倉が怖い。浅倉の前ではついついびくついてしまう田中。田中、物陰に隠れて。浅倉、不器用そうに。

浅倉 糸の太さは・・・均一に。お願いします。

工女達 ハイ（かなり素直に）

浅倉 ……それじゃ、休憩で。

工女達 ハイ（かなり可愛く）

こっそりと覗いていた田中。

田中 何だよそれ！

工女達、そろそろと去っていく。

田中 おい！何で浅倉の言うことは素直に聞くんだ？おい！

誰もいなくなった工場。その中、三助とマスエ、仲がいい。二人は休憩中に逢引だ。

田中 えっ！

そこに近所でボイラー屋を営む大将がやってくる。大将はこの会社が創業してからの関係。親方とは仲がいい。

大将 おい。親方居るか？

三助 えっ？ええ、どこかに居ると思いますが。ねえ。

マスエ うん。

大将 なんだ？おめえら昼間っから違引か？

三助 そんな！いやだなあ。

マスエ あたしらは・・・ねえ。

三助 マスエちゃん。行こ。

マスエ うん。

三助とマスエ去る。

大将 やっぱりそうだ。へへ。いいね、若いもんは。

田中 まったく、どいつもこいつも。

大将 検番さんよ。親方しらねえか？

田中 ボイラーの見回りに行ってると思いますが。

大将 そうかい。そりゃあ、ちようどいいや。

田中 調子が悪いんですか？

大将 ああ、もうだいがくたびれてるみてえだな。

田中 はあ。

工場の片側にガラス窓の入っているのを見て。

大将 ほつ、とつとつこもガラス窓を入れたのか。

田中 ええ、向こう半分はまだ障子なんですが・・・。

大将 へえ、こりゃ明るくていいや。いずれは全部ガラスにするんだろ？

田中 さあ、親方がやってることなんで。

大将 ステイタスってやつだな。こりゃハイカラだ。

田中 へい。

大将 それじゃあ、ボイラーも新調してくれねえかな。なつ。

田中 そつ、そつですね。

大将 はははは。

大将去る。

田中 あの・・・。あれ、俺は何をしようとしてたんだっけ？

そつ言いながら去る田中。

そこにお里とアキ、申し訳なさそつに圭吉（繭運び・アキの兄）がついて来る。

お里 ちょっと、アンタ何とか言いなさいよ。

アキ おらあ、別に。

お里 嘘！ その繭運びに、いい繭ばかり運んでもらって。

浅倉がやってくる。

アキ そんな

圭吉 ……誤解です。

お里 あんた、そんなにいい子になりたいの。

浅倉 何か揉め事かい？

お里 まったく、これ見て。（桶を見せて）粒の揃った繭だけ大盛りじゃないか。こつそり頼んだんだろ。

浅倉 （アキに）頼んだのか？

アキ おらあ……そんなこと言いません。

浅倉 圭吉は？

圭吉 ……おらあ、ただ繭を運んでただけで。

浅倉 そつか。

問

お里 ……それで終り？

浅倉 ああ。

お里 あんたね。それで揉め事が片付くとも思ってたの？

浅倉 違つて言ってるだろつ。

お里 じゃあこれはなに！（桶を見せる）

浅倉 何つて……。

お里 これはね、ざっくり持ってきた繭じゃないの。同じ粒を一粒づつ選んで持って来てるの。見て、この粒のそろった繭を。

浅倉 たまたまじゃねえのか？

お里 たまたまこんなことになるわけないでしょ！

そこに親方、入る。

親方 おいおい、どうしたんだ。

お里 ああ、親方、聞いてくださいよ。この検査、バ力です。

浅倉 あ？

親方 まあまあまあ

アキ （泣き出す）

親方 お里さん、鮎沢アキさんは今年初めての新工だ。面倒みてやつちゃあくんねえか。

お里 えっ、イヤですよ。

親方 そつ言わずに、おめえは優等工女だ。

お里 ……。

親方 この子はまだ、何にも知らねえんだ。この子の手を見てみる。

お里 えっ？（アキの手を見る）あんた、火傷やけどしてるじゃないか！

アキ ……。

浅倉 （親方に）すみません。気がつきませんでした。

親方 なっ、頼んだぞ。

お里 ……はい。

お里、アキを見て。

お里 あんた、行くよ。

アキ （泣いている）

お里 いつまで泣いてるんだい。さっさとおし。（浅倉と目があって）フン！

親方、ニコニコして見守る。お里、アキ、移動。

親方 すまん。採め事を引き受けるのも検番の仕事だ。

浅倉 はい。

親方 あの、繭運びの圭吉はなあ。アキの兄なんだ。実家の方が貧しくて借金もあるから、こども達はみんな働きに出されているようだな。少し

でもいい糸をという兄の思いかもしれない。

浅倉 ……

親方 兄弟を思いやるというのは、悪いことじゃないが、仕事は別物だ。また、同じようなことが起きないように、それとなく、見てもらえないか。

浅倉 はい。

親方 それに、田中にも、もう少しやさしくな。

浅倉 目一杯、気を使っていますが……。

工女の休憩室。お里がアキの手に薬をぬっている。

お里 よし。もう、大丈夫。蒸気じょうきは熱いから気をつけな。

アキ はい。ありがとうございます。

お里 いいかい、朝は5時に起きてすぐに機械の準備、人より早く準備をする。これが基本。できたら朝飯あさめしだよ。

アキ はい。

お里 仕事は夜の6時まで、それから自由だけど、しばらくは私が仕事を教えてあげる。

アキ ありがとうございます。

お里 残業のある日は、諦めな。風呂入ったら寝るだけだ。

アキ ……はい。

お里 部屋の掃除もすんでやる。人に言われてからじゃダメだ。わかった。

アキ はい。

お里 そうそう、ここはエントツからでたススが多いからね。ススをみつけても、濡れ雑巾で拭いちゃだめだよ。炭みたいに真っ黒になっちゃうから。団扇でこつパタパタやって外へ出すんだ。

アキ はい。

お里 やってみな。

アキ はい、(やってみる)こつですか？

それを眺めている親方と浅倉。

親方 あの子達は、みんな働き者のいい子達だよ。

浅倉 そうですね。一人変なのがいいますが。

親方 ははは、まあ、うまくやってくれ。

浅倉 まあ、なんとか……。

浅倉が都会の人間であることは皆が知っている。だからかも知れない、なんだか一人浮いている雰囲気か漂う。親方はそんな浅倉に目をかけている。それが何故かは、まだ謎のまま。

親方、ご機嫌に歌を歌いながら去る。

恋はやさしい 野辺の花よ

夏の日のもとに 朽ちぬ花よ

熱い思いを……

去り際、浅倉とお里が目を合致す。「フン」と二人とも不機嫌に。

転換

うさんくさい歌と共に現れる、うさんくさい警官の警部と巡査。ダンスを伴って踊る。まるで、ミュージカル。(マイケルジャクソンのスリラーを替え歌で、ダンスはPVのアンサンブルをコピー)

俺たちは警官 正義の獅子なんだよ (なんだねえ)

悪事は許さない ねずみの子一匹 (一匹)

大正デモクラシー 文化の影に潜む (潜む、潜む、潜む)

かつこのエリア 悪は俺たちの アイムベリーナイス!

(アンサンブル。沢山のダンスサーの中に囲まれ警部のボルテージは最高潮。かつこよくステージング)

クール・イズ・ビューティー

ビューティーナイト 悪事は許さない ねずみの子一匹

クール・イズ・ビューティー (ふう、ふ)

ビューティーナイト

それが俺たちの トレー トレードマーク

ダンスが終るとダンスサーたち(20名くらい)に敬礼。ダンスも敬礼して去る。

ところ変わって交番。電話をしてる警部。蓄音機から優雅な音楽が流れている。

警部 にしても、長野県というのはいけませんなあ……。そうは思いませんか 萩原警視。

興奮している警部

警部 平和すぎる! なにしる人はいいし、治安はいいし、そりゃあもつ皆、今にも腕組んで踊りだしそうですよ。

警部 うん、うん。戦場は大変でしょうな。日露戦争時など、ロシアは極寒。なおかつシベリア鉄道でロシア本国からの補給も並々ならぬ速さだったとか。しかしながら、大日本帝国陸海軍の目覚ましい活躍で見事に勝利!

蓄音機のスピードが落ちる。ハンドルに手を伸ばす警部。

警部 ……苦戦はしたが……。

蓄音機、止まる。ハンドルに手が届かない。

警部 ……何と言っても一番目覚しかったのは、東郷閣下の日本海海戦で

の大勝利。最新鋭戦艦四隻を含むロシアのバルチック艦隊を完膚なき
までに叩きのめ……あれ？もしもし？

受話器を引っ張りあげると、コードが抜けている。

警部 しまった……。

と、そこへ巡査、入ってくる。

巡査 警部、巡回より戻りました。……どつされました？

警部 ……いや、なんでも……。で、どつだった？何かあったか？

巡査 異常なし。静かな夜でした。

警部 ダメじゃねえか！

机を殴りつける警部。

警部 チカン、強盗、婦女暴行、地震、雷、火事、親父！何か一つくらいあ

んだろ！

巡査 お、落ち着いてください警部。

警部 ここには女工が三万人も居るんだよな？！

巡査 しかし、工場の規律は徹底してますから……。

警部 クソッ俺は一生警部とまり……。そんなことあっちゃいけねえんだよ！

巡査につかみかかる。

巡査 わ、わかっています！警部殿！

警部 だったら事件の一つでもおこしてきやがれ！。

巡査 そ、それじゃあわたしが逮捕されるじゃありませんか！

警部、にやつと笑い。

警部 いいじゃん。

巡査 よかないですよ！

と、猫の叫び声が聞こえてくる。

警部 鬼塚！女の悲鳴だ！

巡查 警部。あれは猫の声です。

警部 俺の耳に聞き間違いがあるってか？！

用意していたほら貝をむんずとつかみ、けたたましく吹く警部。

巡查 おっ、これは警部の本気モードの印。

警部 行くぞ鬼塚。

巡查 はい！

と、そこへ地主がやってくる。どこかぶてぶてしい金持ち風。

地主 ごめんください。

警部 どけ！それどころじゃないんだ！道で女が！・・・おや、地主どの。

巡查 警部は今お忙しいんだ。

地主 あの・・・。

警部 なんだ。

地主 はい、実は・・・その・・・。

警部 なんだ！早く言え！

地主 はい！実は、娘のことで。

警部 娘がどうした。

地主 い、家出・・・。

警部 家で暴れてるのか。包丁持って。

地主 そんなわけないでしょ。行方がわからなくなってしまって。

警部 行方が？

地主 はい。これが、娘の写真です。

警部 迷子かよ。（写真を受け取る）ふおおお！

巡查 ああそう。我々の専門外だ。地主さん。他を当たって・・・。

警部 かわいいじゃねえか！

警部、突然やる気になって。

警部 そつか、いつごろから！

巡查 警部？

地主 一年ほど前か・・・手を尽くしたのですが、見つからねえんで。

警部 なるほどなるほど。

地主 もう心配で心配で。飯もノドを通らねえんです。（げつぶ）

警部 えっ？

地主 いや、ちよつと食べ過ぎ……。

巡査 はっ？

地主 どうか見つけてはもらえんでしょうか。

警部 やっぱりな！

地主 な、なにがです？

警部 アナタの娘さんは誘拐ゆうかいされています。

巡査 はっ？

地主 まさか……。だって、金の要求も無いし……。

巡査 警部殿、いくらなんでもそれは……

警部 いいや、間違いなく言える。これは誘拐です。

地主 なっなんて？誘拐。

巡査 でも警部どの。

警部 金持ちなら誰でもいいのです。それが悪党あくどうなのです！

地主 悪党！いや、しかし娘は……。

警部 お任せあれ。この部署ではわたくし、ベテラン、の四文字が一番似合う男ですから。

地主 でも、娘は……。

警部 鬼塚！出動だ。

巡査 しかし、警部どの！

ホラ貝を吹く警部。

地主 なんですかそれ。

巡査 だめだ、諦めてください。警部殿は本気だ！

地主 はあ？

警官隊が現われる。

警部 行くぞもろども！

一同 はい！

警部、巡査そして警官隊が出撃する。あとに残された地主。

地主 あの〜せめて名前とか歳とか……。

地主去る。

転換

一幕四場 「操糸場の朝」

早朝。まだ薄暗く、工場内に工女たちの姿もない。

立ち上る湯気の中、工場内を行ったり来たりする男の影。

親方だ。仕事の前準備を黙々としている。

そこに浅倉、宿舎の方からやってくる。

浅倉 おはようございます、親方。

親方 おお、浅倉か。

浅倉 お早いですね。何かすることは…。

親方 いや、こりゃあ私の仕事だからね。

浅倉 わたしにも何かやらせてください。

親方 じゃあ、一緒に。

浅倉 はい。

そこに、おかみさん(親方の奥さん)が入ってくる。

おかみ おや、ふふ、仲良しなこと。

浅倉 おはようございます。

おかみ 朝飯ができましたよ。

浅倉 ありがとうございます。

親方 ああ、起こしてきてやってくれ。工女さんたち。

おかみ はいよ。

おかみさん、宿舎の方に行きかけて、

おかみ あんた、ちょっといいかい？浅倉も。

浅倉 はい。

親方 なんだ？

おかみ、少し言いあぐねて。

おかみ …先週、ちょっとあつたじゃないか。

親方 ん？

おかみ ほら、二軒下の山代製糸の。

親方 ああ、工女さんが諏訪湖に身投げしたって。

おかみ (小声で)それがさ、工場の検番と恋仲だったそうだね。

親方 その男と何か？

おかみ 結婚の約束をしていたそうだよ。

親方 そいで身投げなんか。どうして…。

おかみ　それが、親に言う前にとつても、子どもをね。

二人　ええっ！

おかみ　お腹が膨れてただって。

浅倉　……。

親方　……。

おかみ　誰にも言えなかつたんじゃないかねえ。

親方　もげえこんだ。(かわいそうなもんだ)

おかみ　嫁入り前にねえ。

親方　あと八十年もすりゃ「できちゃった結婚なんて」よくあることだ。

おかみ・浅倉　ええ？

あつけに取られるおかみと浅倉。

親方　ほら、辻ちゃんとか。

調子に乗って合せる浅倉。

浅倉　ああー。安室ちゃんとか。

親方　そうそう。

親方・浅倉　へへへへへ。

一人冷静なおかみさん。

おかみ　ふたりとも、今は大正時代だよ。

我に帰る親方と浅倉。

浅倉　・・・すみません。

親方　ごほん。生きてさえいりゃ、なんとかなるもんだ。

おかみ　そうだよ。ひとこと言ってくれりゃ、支えてやることもできる。

親方　それで、心配してたのか。

おかみ　ああ。あんたたちは、ずっと工場で一緒だろ。

親方　ウチでは若い女の子も預かってるからなあ。

おかみ　浅倉、まさかとは思うけど……。

親方　えっ！

浅倉　いや、そんな事しませんよ。

おかみ　工女さんたち、お前さんの噂で持ちきりだつちゅうよ。

親方　(おかみに) そうなのか？

おかみ　ほうさあ。横浜の人だでな。

親方　(浅倉に) モテモテなのか？

いつのまにやっけて来たのか、アキがその会話に混じって。

アキ そうなんです。

おかみ そういや、最近お里さんと何かあるのか。

親方 そうなのか？

アキ どうなんですか？

浅倉 ありああ、お里さんが勝手につかつかって来るんで…ん？

親方 ん？

アキ えっ？

アキに気がついて。

全員 わー！

おかみ アキちゃん、いつからここにいたんだい！

アキ 今さっき。浅倉さんとお里さんが何かあるってあたりから。

親方・おかみ よかった。

浅倉 よくない！

アキ お似合いですよね。

浅倉 似合っていない！誤解だ！

三人は、今の話をこまかすように。

おかみ あーアキちゃん、皆起きてくるかい？

アキ いえ。おらは、お里さんと5時にここですって。

親方 寝坊してんだ。お里のやつ。

アキ 何かお手伝いすることは…。

親方 心配要らないよ。コレは私の仕事だ。

おかみ お前さんは、まず朝飯あさめしだよ。浅倉、食堂に連れてってあげ。

浅倉 えっ…はい。

浅倉、アキを宿舍と反対の食堂の方へ連れて行く。浅倉は子供が苦手だ。特に質問されることを嫌がる。アキの目はまさしくそれだった。逃げるようにアキを先導する浅倉。追いかけるアキ。二人の姿が見えなくなると、おかみさんは話し出す。

おかみ なーんてできた子だろうね。

親方 ああ。

おかみ あの子達は、私にとっちゃ娘みたいなもんなんだ。

親方 今度、折りを見て皆に話しておくよ。

おかみ 頼んだよ。さあ！かわいい娘たちを起こしにいかなきゃあ！

おかみさん、宿舎の方へ去っていく。

入れ交わりに浅倉が帰ってくる

浅倉 ふつ。(何とか質問責めから逃れて来た)

親方 さあ、ふんばらねえと。飯が終わったらすぐ仕事だぞ。

浅倉 はい。

親方、作業に戻る。

浅倉 ……親方、感謝しています。

親方 どうしたんだ、急に。

浅倉 こんな上等な待遇で雇ってくださいって……

親方 お前さんは糸商人だけあって、糸や繭のことに詳しい。それによく働いてくれる。期待してるよ。

浅倉 親方……

と、その時ジャンジャンとけたたましい半鐘の音が響く。

親方 おいおい、なにも半鐘鳴らして起こさなくても。

浅倉 親方、様子が変ですよ。

親方 えつ。

親方は、ふいに外の空が赤いのを見つける。

そこにおかみさんがかけこんでくる。

おかみ 火事だ！火事だよ！

親方 なに！

浅倉 早く、皆を避難させないと……

おかみ いや、ウチじゃないよ！あっちのボイラ屋だ。

空はますます赤く染まり、あちこちで半鐘の音。工女たちも集まり、

窓に身を乗り出したり庭に出たりして様子を伺う。

浅倉 大変だ！

親方 手を貸してやらんと！男手だ！浅倉！

浅倉 はい！

親方 かかさ、すぐに工場長たちをよこしてくれ！

浅倉、駆け出す。親方も指示を出してすぐに後を追つ。
轟々と燃える炎と、半鐘の音が大きくなる。

転換

一幕五場「焼け出されたボイラー屋」

焼けたボイラー屋から従業員を助け出し、ヤマネに連れてきた浅倉達。
おかみさん、お里、アキ達が火傷の手当をしている。

浅倉 大丈夫か！

従1 地道にやってきた俺らの工場が…ちきしょう。何でこつなつたんだ。
親方 命があつただけでも良かったじゃないか。

従2 ……。

従3 ……終わりだ、何もかもよお。

浅倉 簡単に望みを捨てるな！

従1 簡単にだと！？あそこ一筋で働いてきたんだ！お前に俺らの気持ち
がわかるか！ちきしょう！

浅倉 ……。

介抱かいほうしていたお里を振り払い、その場を去っていく従1。
無口にぼつんと大将。寂しい空気。

従2 ……悪気あくけはないんです。

浅倉 すまねえ。

お里 浅倉さん…。

浅倉 諦めないでほしいんだ…。

従3 ああ。

浅倉 人間諦めたら……終りだ。

従2 ……はい。(泣いている)

お里 さあ、包帯ほうたいめました。

アキ 大丈夫？

従3 ああ。ありがとう。

親方 悪かったな。(アキ達に)食堂の奥に空いてる部屋がある。連れて

行ってあげてくれないか。(従達に)ゆっくり休んでくれ。

親方、大将の元へ。

大将 親方……すまねえ。

親方 困った時はお互い様だ。

大将 ざまあねえ……工場がなくなつちまった。

大将は涙を溜めた眼で上を見上げ、従業員たち動かない。

大将 最近若いのがやつと育って仕事も増えて、会社もこれからつて時に
よ。

親方 大将……。

大将 親方……もつとエントツ建てたかったんだけどよ。そつもいかな
くなつちまつた。申し訳ねえ……。

親方 大将、よければ会社のこと、まかせてくれないか。

大将 えっ？

親方 ウチが……再建のために資金を調達しよう。

大将 とんでもねえ！

親方 大将には、ずっと面倒みてもらったんだ。これからもお願いしたい。

大将 えっ！

大将 ……。

親方 それに……若い奴らはまだやる気十分じゃないか。

従業員達、泣きながら頭をさげている。

親方 今は俺に支えさせてくれ。

大将 親方……必ず！お返しします。必ず……。

暗転

一幕六場【お里の指導】

工女達、作業をしている。繭を運ぶ、圭吉や三助、検番達。作業の様子を見て回っている。浅倉は、モップで床掃除をしている。

お里 2番は糸が細いから、早く糸を足さなくちゃ。

アキ は、はい！

お里 ほら、その繭、その繭なら太い糸が取れるから。

アキ どれですか？

お里 そのよ。ほら文太さんトコの繭よ。

アキ これか？

お里 それは、源三さんトこの。

アキ そんなこと言っただって。

お里、アキの鍋から繭を一つ取り出し、手に取った繭を見せる

お里 この繭だよ。文太さんトコの繭は皮も厚いから太い糸が取れるんだよ。

よね また、やっている。

いち よく、やるよねえ

うめ あの子も良く逃げないねえ

ハル・キク ほんと

お里 もっと繭を見極めなきゃ。繭の大きさや糸の太さはみんな違うんだから！

アキ は、はい（力ない返事）

お里 やってみな。

アキ はい。

アキ、作業を再開。お里、自分の作業をしながら、アキを見守る。

お里 2番の糸、ちょっと太くなってきているよ。平八さんトコの繭をつかいな。

アキ えーと。

お里 何度言ったらわかるの！その繭でしょ。毎日やっているんだからいい加減覚えな。

アキ はい（弱々しい。）

アキ、だんだんと作業に集中できなくなっていく。

お里 アキ！4番の糸が太すぎる！
アキ ごめんなさい。

浅倉、見るに見かねて。

浅倉 お里さん。ちょっと厳しくねえかい？

お里 アンタが口出すコトじゃないでしょ。

田中 そうだ、浅倉、お前は黙っている。

浅倉 うるせえ！おめえこそ黙ってる！

田中 俺は・・・先輩だぞ。

浅倉 あっ？

田中 いえ、何でもありません。

浅倉 もう少し分かりやすい教え方あんだろつ。文太とか源三ぶんた げんぞうって・・・

お里 しょうがないでしょ。農家によって繭まゆが違ちがうんだから

浅倉 ・・・農家によつて違ちがう？

お里 ヤマネで使っているのは、ほとんど、この辺りの繭まゆだし。いい糸を取
るなら、繭まゆのクセを早く覚えなきゃ。

浅倉 農家は、どこから繭まゆの卵たまごを手てにいられたんだ？

田中 そりゃおめえ・・・。

浅倉 えっ？

田中 いや、それはですね・・・。安いのいろんなところで買かって来たり。
浅倉 桑かいの葉はは！

田中 ひええ・・・。裏庭うらにわの桑かいの木きから取とったり。

浅倉 ちゃんと栽培さいばいしてねえのかい。

田中 俺おれのせいじゃねえよ！そんなもんもんに、手てなんか掛かけられるわけがねえ
だろう？

浅倉 じゃあ、バラバラの繭まゆじゃねえか。

お里 そついうもんじゃないの？

浅倉 だから、糸いとが安定あんていして取とれねえんだ。それに、くず糸くずいとも多おほすぎる。

お里 アンタ、何を言いってるの！

浅倉去る。

田中 ちきしょう。生意気せいきな野郎やろうだ。ねえ。いいんですよあんなヤツやつのいう

こと間に受うけなくて・・・。

お里 繭まゆがバラバラ？

田中 あん・・・お里さん？

操系場の作業さくしやばは続つく

転換

一幕七場 二人の兄妹

工場の外。アキが泣いている。兄はオロオロしながら、アキを慰める。

圭吉 ……アキ。

アキ 不器用だから上手に糸も取れない…。

圭吉 おまえ、もうそんなんこと言ってるだけか？

アキ だって。

圭吉 アキはいつもおつとつにホメられてたじゃねえか。

アキ えっ？

圭吉 ほら、糞打ちする時に、「アキは器用だな」って。

アキ 糸取りと糞打ちは違うでしょ！

圭吉 ……。

兄の優しい言葉もむなしく、アキは泣きじゃくる。

そこに親方やってくる。

親方 なんだ、こんなところにいたのか？

圭吉 あ、親方。

涙をぬぐうアキ。恥かしそうに下を向く圭吉。

親方は気持ち察して話し出す。

親方 アキちゃん。糸取りなんて、最初から上手くできる人なんていなかったよ。

たよ。

親方の顔を見るアキ。

アキ ……お里さんも？

親方 ああ。彼女も最初は上手に糸を取れなくてね。よく泣いていたよ。

アキ ……。

親方 みんな努力してるんだ。

アキ ……はい。

親方 アキちゃん、君がここで仕事しているのは何のためかなあ…。飛驒に
いる家族のため…かな？

アキ はい。おつとおつかあを少しでも楽にしてあげたいんです。それに
弟にも、おいしいものを腹いっぱい食べさせてやりたい…。

圭吉 アキ…。

親方 そうだな…。それは確かに大切な事だ。でもな、それだけじゃないん

だよ。

アキ、圭吉顔を見合わせる。

親方 いいかい、いい糸を取れば、それが着物や製品になって売れていく。

そして、糸の注文が入ってまた繭が必要になる。そうすると蚕かぶとを育てている農家にも仕事が増えて。わかるかい？

アキ ううん。

親方 つまりね、アキちゃんが糸を取って仕事をするって事は、みんなの役に立っているってことなんだ。そう考えると面白いだろ。

アキ はい。

親方 だから、アキちゃんも頑張ろう。

アキ ……はい。

間

親方 ……私は君の父ちゃんにはなれないけど、寂しくなったり不安になつたりした時には、甘えてくれていいんだよ。

圭吉 親方……。

アキ ありがとうございます。

アキ おとう……か。今ごろ飛驒トビでどっしてるのかなあ……。

そこに、飛驒のイメージが重なる。(紗幕で透かす)
父と母、できるだけコミカルに。

父 ああ、アキ……こんなに硬く、細くなっちゃって……。

母 あんた、それは一升ビンだよ。

すると、別のものを手に取りまた泣く。(マイム)

父 うあああ……アキ、ごめんよ……なんだよ、骨しかないじゃねえか。

母 あんた、それは新まだよ。

すると、また別なものを取り。

父 髪だつてバリバリに固まっちゃまって、

母 あんた、それはホウキだよ。

勢いで母の足にしがみつく。

父 うわああ・・・アキ。カサカサしちまって、あっこりゃ大根が。

母 あ〜ん〜たあああ！

父、両手を合わせて「ゴメンゴメン」とやったり床に手をつき、頭を何度もペコペコしている。

飛驒のイメージ消える。

圭吉 きつと仲良くやってるよ。

アキ (少し笑って) そうだね。

親方 そうだ。皆、部屋でおにぎりを食べているから、姉さんたちに来た

ばかりの頃の話聞いてもらえん。

アキ はい！

アキ、元気よく走り去る。圭吉、深々と頭をさげる。

圭吉 ありがとうございました。

遠くで盛り上がる工女の声。

親方 もつ、するんじゃないよ。

圭吉 え？

親方 繭の大盛り。

圭吉 あ・・・。

親方 工女さんは腕のよさで勝負しているんだ。誇りをかけた戦いだ。ずるはいけないよ。

圭吉 ……はい。でも、親方。繭って・・・。

親方 なんだ。

圭吉 いえ、何でもありません。すみませんでした。

親方 ああ。

親方去る。

圭吉 ……アキはどうして、うまく糸が取れたんでしょうか？

暗転。

一幕八場【プレゼン】

操糸場の作業。黙々と糸を挽く工女たち。

そんな時、浅倉、工場長と親方に対してプレゼンを行っている。

工場長 浅倉なんだ？ 話があるって。

浅倉 繭の品質改良の話です。

工場長 品質改良？

親方 繭のか？

浅倉 ええ、繭の種類や大きさを同じに出来ればと……。

工場長 そんな無茶な。

浅倉 おりさんは繭の質や太さを選んで糸を取ってます。

親方 優秀だからなあ。

浅倉 しかしアキちゃんは、繭のクセなんてわからねえ。

工場長 仕方ないだろ。来たばかりなんだし。

浅倉 そこですよ。経験がたりねえ新工は、いい糸が取れねえ。

親方 つまり、繭の質が同じになれば、糸取りがもつと楽になると。

浅倉 そうです。

工場長 繭の選別も出来ての一人前の工女だろ。

浅倉 そこを変えなくちゃいけねえと思うんだ。

工場長 生意気な口をきくな！お前だって来たばかりのくせに。

親方 面白そうじゃないか。

工場長 え〜

親方 農家によって蚕の卵も育て方も違う。それをまとめることができるか？

浅倉 はい、やらせてください。

工場長 親方、

親方 うちが勝手に農家とコトを進めるわけにもいかない。何とか地主さんに協力してもらわないと。

浅倉 わかりました。

親方、そういうと浅倉の肩をポンと叩き出て行く。工場長ため息。去る。作業をしていたおり、作業をやめて浅倉に近づく。

おり どうだった？

浅倉 地主さんに協力してもらってさ。

おり そりゃ大変だ。

浅倉 どうして？

おり ヘンクツでわからず屋だから。

浅倉 へえ、良く知ってるな。知り合いか？

お里 ぜんぜん！見た事もない。

浅倉 へえ。

お里 いい糸を取るの、あたしたち工女の仕事だと思ってた。

浅倉 農家にも大切な役割があるんだよ。

お里 どうして今までやらなかったんだろう？

浅倉 岡谷のほとんどの製糸工場が、県外から繭を仕入れているからな。

これじゃあ、地元の養蚕農家は育ちやあしねえよ。

お里 アンタって、そういうのどこで勉強したの？

浅倉 いや、それは……。そんなことより、お里さんは、どうしてそんなに繭の特徴に詳しいんだい？

お里 いや、それは……。

作業をしているマスエの様子がおかしい。

キク マスエちゃん、具合が悪いのか？

マスエ ……大丈夫だ。何でもねえ。

ハル 無理すんな。田中さん、ちょっと。

田中 何だ？

ハル マスエちゃんが具合が悪りいみてえだ。

マスエ倒れる。

田中 大変だ！！

一同 (大慌て)

転換

床で休んでいる工女（マスエ）。心配そうに付き添う親方とおかみさん。少し離れた所（部屋の外）で、工場長や他の工女や検番などが話している。そして、更にその集団からも離れて三助と浅倉。何か話している。

いち どうしたかねえ、マスエさん。

ハル いつもと同じに働いてたに、ねえ。

いち 釜の湯気にあてられたんじゃねえけ？

ハル 悪い病気じゃなきゃいいけど……。

一同 えっ。

工場長 しーっ、静かに。

浅倉 何？三助くん、それって……。

三助 すいません。

浅倉 とにかく、親方にそれを話さなきゃ。

三助 おらぁ怖くて。

浅倉 そんなこと言ってる場合か。

浅倉、部屋にいる親方に。

浅倉 親方！

一同 ！！

皆、部屋の外から息を潜めて中の様子を伺う。

親方 みんな入ってくれ……。

一同ぞろぞろと部屋に入る。

田中 どうですか？マスエの具合は。

親方 ……率直に言おう……。

いち あの、悪い病気じゃあ？

お里 落ち着いて！

親方 来年の6月つてとこだな。

一同 えっ？

ハル やっぱり。

アキ マスエさん。

お里 なんてもげえこと。

浅倉 おい、6月だってよ。良かったな。ははは。

一同 ……。

工場長 浅倉！笑ってる場合か。

浅倉 えっ？

浅倉に詰め寄る一同。

親方 オメデタですよ。

一同 へえ……（気がついて）ええっ！！

工場長 オメデタ！？オメデタって、あの…。

マス工はまだ未婚である。

浅倉がその場の空気を察して口を開く。

浅倉 そうですか！病気でなくて安心しました！なあ、みんな！

一同 えっ…？

一同の視線は浅倉に。

工場長 あ、さ、く、らあ！

工場長、いきなり浅倉につかみかかり、続いて男たちが詰め寄る

工場長 おまえ、なんちゅう事してくれたんだ！

浅倉 え！なんだよ！

工場長 嫁入り前の娘に手を出すなんて！

田中 恥を知れ！

浅倉 いやそうじゃなくて！

工場長 だって俺じゃないし。

田中 俺じゃないし。

圭吉 俺じゃない。

親方 俺でもない。

おかみ あんた！

男たち やっぱりお前だ！

浅倉 だから！

三助 あ、あの…！！

親方 落ち着きなさい、君たち。

工場長 どう見ても、さっき、かばっていたじゃないか。

お里 何か知っているの、浅倉さん。

浅倉 ああ、おい……三助君。

三助 はい！あの、親方！

親方 ん、三助、どうした？

三助 あの……実は。

工場長 まさか……。

田中 まさか……。

圭吉 まさか……。

親方 まさか……。

三助 はい……相手は……

一同 うん。

三助 (笑顔で) 僕です。

男たち ええー！

固まる一同。

一同 地味っ……。

マスエ すみません。

三助 マスエっ？

大変なことになったとマスエ。

マスエ いえ、あの、あたし……どうしよう。

おかみ ご両親になんて説明するんだい。

マスエ・三助 ……。

工場長 こんな事がよそに知れたら……。

マスエ・三助 ……。

おかみ どうして一言言ってくれなかつたんだい。

三助 嫁にする約束をしていました。親方に話す機会をと思っていたんですが……。

工場長・田中・圭吉 三助、いつの間に。

三助 すいません。

3人ショックで座り込む。

たまらず泣き出すマスエ。三助、駆け寄る。アキ、気まずい空気を察して恐る恐るお里に近づく。

アキ マスエさん！赤ちゃんができたの？

お里 ……そうみたいだね。

アキ おめでとう！

お里 (小声) アキ！

アキ え……。

お里、アキを一団から引き離す。

おかみ 子どもつたつて……。

いち (小声) マスエさん、まだ、ねえ。

ハル (小声) 結婚してない……よ、ねえ？

アキ お里さん、赤ちゃんが生まれるのはいけない事なの？

お里 アキにはわかんないかもしれないけど……。

アキ じゃあ、赤ちゃんはどうなるの？

お里 えっ、それは……。

お里、答えられない。誰も答えられる者はいない。と、浅倉がアキの隣に。

浅倉 そんなの嫌だよな。

アキ うん。私は、もしいない子だつて言われたら、えらい切ないと思

う……。

お里 いない子……。

一同、何か気づいたようだ。

親方 いない子どもなんていない。子どもはみんな宝物だ。

おかみ あんた。

親方 ……三助、おめえ、マスエを嫁にもらうつて約束してたんだな？

三助 は、はい。

親方 一生添い遂げると決めたんだな。

マスエ はい！

親方 よし、分かった。この縁は俺が取り持とう。

一同 えっ！

おかみ あんた、簡単に取り持つなんて……。

親方 かかさ、おめえも言つてたじゃあねえか。ここの工女たちは皆おら

とつの子どももみてえなもんだつて。

おかみ ……。

親方 だったら、マスエさんのお腹の子は、おらとつの子孫みてえなもんだ

……なあ。

何故か親方は涙目だ。親方の気持ちを察してうなずくおかみさん。

この夫婦にも何か切ない過去があるようだ。

おかみ ……ああ、そうだね。参った、あんたには！私も、一緒にご両親のところへ行ってやるよ。

マスエ おかみさん……。

おかみ その代わり、三助、きちんとマスエとお腹の子どもを幸せにするんだよ。

三助 はい……おかみさん。

工女たち、口々に二人の名を呼び、祝福の声をかける。三助とマスエ、泣いている。

親方 子供は神様からの授かりものだ。大事にするんだぞ。

三助・マスエ はい。

一同、うれしそう。

アキ・お里 雨降りお月さん 雲のかげ

すると、工女たちが大合唱。替え歌でおどけて見せる。

一同

お嫁にゆくときゃ 誰とゆく？
親方とからかさ 差してゆく

笑い声。

からかさないときゃ 誰とゆく？

シャラシャラ シャンシャン 糸をひく

工女に守られ 嫁いでく

涙で頭を下げる二人。ほっとする一同。皆の泣き笑いに包まれる。

休憩

二幕一場「お盆の祭り 地主へのプレゼン」

人々が集まり、賑やかに踊りやお喋りを楽しんでいる。
お祭りの風景。楽しそうな盆踊り。ステージング。

タイトル「お祭り」

作詞 「小林千冬」

作曲 「市川さつき」

振付 「両角由香・北澤さやか」

今日は楽しい お祭りだ

鯉の煮付けに あんころ餅

活弁 物売り 村芝居

(ヨイサ)

年に一度の 無礼講

(踊り踊って 夜がふける)

今日はお祭り 晴れ着着て

歩く出店の 賑やかさ

赤い鼻緒も 笑ってる

(ヨイサ)

年に一度の 夏祭り (踊り踊って 夜がふける)

たくさんの人々。お祭りを楽しんでいる。老婆現われて。

老婆

暑さも少し和らぐお盆には、どこの会社も賑やかなものでした。工女たちも、会社から3日間ほどお休みをもらえたから、皆その日の来るのを心待ちにしておりました。出店に活弁、あちこちの工場で作る手作りの人情芝居も楽しみのひとつでね。特に盆踊りは本当に賑やかでしたよ。朝から晩まで、人の絶えることはありませんでした。

遠くでお祭りの音。

浅倉が農夫の文治とよし、地主に話している。惘然として聞く地主。

老婆

そんな時でも浅倉さんは、例の繭の品質をよくするために、村々の養蚕農家を巡り巡っております。

浅倉

まず、この繭を見てくれ。

と、浅倉、繭を農夫と地主に渡す。頼みに来た割には横柄な浅倉。浅倉は人に説明するのが苦手らしい。

手にとって見る農夫。地主は適当に繭をもて遊んでいる。

文太 ほあ、こりやまたいい色の繭だ。

浅倉 そうだろう。これが、その繭の種だ。ほら、見てくれ。

卵のついた和紙を渡す。

老婆 お蚕さまの卵を和紙に貼りつけたものを「蚕の種」と申しまして。そ

れと上等な桑の葉、そして消毒薬のホルマリンをリュックいっぱい詰め込みましてね。丹念に説明をしたんです。

浅倉 この種はな、一代交配種っていう「日本種」と「シナ種」を合わせて

作られた、新しい「蚕の種」だよ。どうだ？

よし こいつが？

浅倉 おお。こつちも見てください。

蚕の種と繭を見比べる文太。

老婆ハケル。浅倉は顔は怖い、根が優しい人らしい。人懐っこいと
言っている。人を引きつける力がある。しかし、文太はずこし顔が暗

くなる。文太は地主が怖いようだ。

文太 確かにいい繭だけんど・・・ウチは去年、お蚕様は病気で全滅しただ。

病気防ぐ薬も高けえし、そろそろ養蚕もやめようと思ってただけんども・・・。

浅倉 心配いらねえよ。消毒薬のホルマリンも桑の葉もこつちで用意するん

だ。できた繭は、ヤマネですべて買い取らせてもらっよ。

よし ええ？ほんとけえ？！

浅倉 おお。

文太 でも、その種や消毒を買う金が・・・なあ。

浅倉 心配するな。金は、繭が出来たときに、払ってもらやあいい。

よし ほう。後払い。へ。

地主 くだらねえ、やめとけやめとけ。

浅倉 あっ？

地主 いくら後払って言ったって、結局払うのは百姓連中じゃねえか。そ

う云うのをな、押し売りっちゅうだ。

文太 地主さん・・・

地主 浅倉、とか言ったね。悪りいが、ソイツはできねえ相談だぜ。

浅倉 地主さん、わかってくれよ。繭の質と粒がそろえば、手馴れた工女さ

んでなくても上質の糸が・・・。

地主 そりゃそっちの都合だ！そもそも、農家でそんなことできる訳がねえ。

文太 地主さん。そこまでおらぁとくに信用がねえだか！

地主 なに？

文太 ……すみません。

地主 去年、病気で蚕がダメになったから生活ができないって泣きついてきたのはどこの誰だったかね。

文太 ……。

よし ほんときほ、ほつだったけども、ちゃんと消毒も用意してもらえりゃ。

文太 ほれに、繭もたくさん売れりゃ、オラアとこの生活もなあ、楽になるんじゃないかね…。

よし ほうなりゃ、地主さんだっていらに。

文太 なあ。

地主 ……ダメだダメだ。悪いが、帰ってくれや。

と、冷たくはけていく地主。

文太 ……申し訳ねえだ。ヤマネからわざわざ来てもらったに。

よし 地主さんは頑固者だけん、絶対言うこと聞かねえだよ。

文太 地主さんがクビを立てに振らねえと、あんたんとこに繭持って行けねえことになるが…。

浅倉 大丈夫、きっと地主さんもわかってくれるよ。

農夫、浅倉の持って来たものをありがたく受け取ると去って行く。

一人残る浅倉。

祭りの賑わい。

転換

一幕二場「盆踊り」

人ごみの中に二人の工女。「富貴堂」「天然堂」「豊島屋」「浜新聞店」「精良軒」など、当時から現在まで岡谷にあるお店の看板。

老婆 「富貴堂」「天然堂」「豊島屋」「浜新聞店」「精良軒」「カンカラ屋」は当時から岡谷の地で商いをする、老舗中の老舗です。三万人もの工女さんたちが居た岡谷では、こういった店々が大変賑わっております。

お里 アドリブ。
アキ アドリブ。

手首にはお揃いの「飾りひも」お里の手作り。

お里 アキ、里芋食べよっか。

アキ お里さん、お祭りん時はいつもそれだ。

お里 平野村の里芋は日本一だもの。

二人、ウキウキと祭りを楽しんでいる。

反対側から二人の酔っ払い登場。ヘロヘロで歩いてくる。

コブン アニキ、飲みすぎですよ。

アニキ うるせえ！

コブン すぐに女の子みつけて来ますから。

アニキ さっきから逃げられてばかりじゃねえか！

アキ 相変わらずえらい人。

お里 (アキの手首を見て) やっぱり桃色ももいろにしてよかった。

アキ えへへ。圭吉けいき兄あにさまも、似合っつて。

お里 よかった。

お祭を楽しんでいる人々、「飾りひも」を羨ましがる。(わざとらしく)

アキ ありがとう、お里さん。

お里 今度はもっとうまく作るね。

アキ えー？充分だよ。

二人、笑つ。そこに酔っ払いが通せんぼするように話しかける。

アニキ ちよつと、お嬢ちゃんたち。

アキ えっ？

アニキ 晴山堂^{せいざんどう}であんみつでも食べねえか？

コブン 焼き団子もつめえよ。

お里 いいよ、行こう、アキ。

コブン ちよつと待った！

アニキ へえ、おしゃだねえ。

アニキ、するりとアキの「飾りひも」をとる。

老婆 実はこの連中。糸買商人です。糸買いというのは、農家や民家とつ

た生糸を買い集めて、糸を扱う商店に売り歩く仕事をする人たちで

す。横浜開港以来、横浜は本当に近い関係でして、この手の連中

がたくさん横浜と岡谷を行き来しております。

アキ えっ！返して！

アニキ (ひらひらとちびつかせながら)俺たちと一緒にお祭り見物してく

んない？

お里 ちよつと！

アニキ なんでもおごるからさ。

コブン えっ。アニキ、俺にもおごってくれたことないのに…。

アニキ 金を出すのはお前だぞ？

コブン そんなあ。

アキ あの、返してください、それ！

アキ、酔っ払いに近づくが、かわされ、勢いで転んでしまう。

アキ きゃあ！

アニキ おやおや、ごめんねえ。

怒ったお里、アニキにビンタをかます。

アニキ なにい？

お里 なんだい！このチンピラ！

コブン アニキ！

お里 てめえらみたいな器^{うつわ}のちつちええ男、誰が相手にするかってんだ！

アニキ なにい？

お里 どうせ、誰にも相手にされないんだろ。それでヤケ酒飲んで、みっ

ともないったらありゃしないね。

アニキ こゝ、このアマ！

アキ きゃあ！

酔っ払い、お里に殴りかかる。

その時！浅倉が飛び出しお里をかばい殴られる。「ベシッ」

アキ あっ！浅倉さん！

お里 あんた……

コブン なんだ？おめえ。

アニキ いい格好しやがって。

酔っ払い、浅倉に殴りかかると浅倉簡単に殴られる。それどころが
すっかりやられてしまう浅倉。

アニキ ヘ！きよ今日のところは勘弁してやる！

コブン アニキ！ちよろいもんですね！

アニキ あたりめえだ！おれ様を何だと思ってるんだ。

コブン 気をつける！このヘタレが！

浅倉 いてて。

お里 浅倉さん。大丈夫かい！

少し離れたところから、浅倉の顔を見た酔っ払い。

コブン アニキ。

アニキ なんだ。

コブン あいつ、浅倉じゃねえですか？

アニキ えっ？

酔っ払いたち、固まる。

アニキ やべえ、逃げろ。

コブン 何であいつがここに。

酔っ払い、逃げ去る。浅倉、何事もなかったように立ち上がると。

浅倉 バカ野郎！ヤマネの工女がこんなところで騒ぎをおこしてどうすんだ。

お里 ごめん。

アキ 浅倉さん血が出てるよ。

浅倉 大丈夫だ、コレくらい。

お里 でも、痛そう。

浅倉 アキちゃんも大丈夫？

アキ ……うん、でも…。飾りひも、持って行かれちゃった…。

浅倉 え？（浅倉、連中を追っかけようとするがすでに遅い）

下を向いて、泣き出しそうなアキ。

お里、自分の「飾りひも」をはずして浅倉に見せる。

浅倉 へえ、キレイなもんだ。

お里 せっかくのお祭りだからね。オシャレさせてやるうと思って。

アキ ……お里さんが編んでくれたのに。

浅倉 これ、お里さんが？

お里 あたしのあげるよ。また作ってやる。

アキ え……いいの？。

お里、自分の「飾りひも」を、アキの手首に結んでやる。

お里 アキに似合う、桃色のやつ。ね。

アキ ……うん。ありがとう、お里さん！

浅倉 よし！アキちゃん、今日はお祭りだ！楽しく行こうや！

アキ 一緒にお祭り回ってくれるの？

浅倉 ああ、さっきみたいのが来たら心配だしな。

お里 ……。

浅倉 なんだよ。

お里 何でもない。

浅倉 おおそつだ、この天王森てんのうのもりの神様。

お里・アキ えっ？

浅倉 工女さんの味方みかたなんだとよ。

お里 工女さんの味方？天王森の神様が。

アキ 変な神様。

浅倉 はは、変じゃねえよ、何でも願いを叶えてくれるってよ。

お里 へえ。

かしわ手を打って、お祈りする3人。終ると、お互いの顔を見て笑
い出す。

アキ 浅倉さんは何色が好き？

浅倉 あっ？

アキ 好きな色だよ。ねえ、何色？

浅倉 ははは、そつだな。

浅倉、ちよつと切なそつな顔をして。

浅倉 若草色かな。・・・お袋が好きなんだ。

お里 へえ、お母さんが・・・

二人に微笑む浅倉。

浅倉 ああ。若草色の着物が良く似合つてな。

お里 お母様は今、横浜に？

浅倉 おお。

お里 そつ。

アキ 若草色だつて。

お里 なに？

アキ 飾りひも。

お里 ええ？ああ、作つてあげようか。

浅倉 はは、・・・じゃあ、約束な。(すごく照れながら)

お里 ……うん。

意識し合う二人。

アキ ねえ。

浅倉・お里 えつ？

アキ どうしたの？二人とも。

お里 ど、どうもしないよ。

浅倉 活弁、観に行こうか。

アキ うん。

お里 行こう。

浅倉 大口あけて笑つんじゃねえぞ。

お里 えっあたしが？

アキ はは、やりそつ。

お里 やつぱり意地の悪い男だ！アンタは！

浅倉 ははは。

お里 ……ふん。

アキ やつぱり天王森の神様はすごい。

浅倉・お里 えっ？

アキ だって、あたしのお願いが叶ったもん。

お里 アキちゃんのお願いつて活弁？

アキ二人を見てニッコリ。

アキ ……うん。そうだよ。

アキが先に走って。

アキ 早くー！二人とも！

浅倉 おいおい、そんなに急ぐと、また転んじゃうぞ！

アキ 早く！

浅倉 (お里に) おい、行くぞ。

お里 ……うん。

アキを追いかける浅倉。

行きかけて一人残るお里。

お里 やくそく。…今日はいい日だ。

お里、ニッコリと微笑むと二人を追いかける。祭囃子が、遠く聞こえる。

転換

老婆

大正9年くらいは、それこそ製糸業も飛ぶ鳥を落とす勢いで「成金」なんて言葉が生まれたのも、その頃じゃなかったでしょうか。会社を休めるのは月に2度。忙しい時なんかは、残業もありましたが、休みをとれば町にもできることができました。ところが、大正十二年頃から、不況の風が吹く時代になりまして、経営者の方々は大変です。毎日、相場とにらめっこでした。

二幕三場「社長の夢」

会社の事務所で話し会う親方と工場長。

親方 駄目だな。この糸の値段じゃ売るわけにはいかない。

工場長 しかし、ここ数カ月、糸の値段は下がり続けてます。このままだと、

損失がさらに大きくなりますよ。

親方 今、売っても大損だ。少し、生産を押さえるか。

親方 今日は終りにしよう。

工場長 親方こそ、お疲れでしょう。

親方 私は大丈夫だよ。

親方、一升ビンを持って来て。

親方 一杯どうぞだ。

工場長 ありがとうございます。

工場長 親方。・・・浅倉の件なんですが。

親方 ああ。

工場長 どうも、地主さんにはわかってもらえないようですな。

親方 今のままの繭じゃあ、この先、どこにも相手にされなくなっちゃう。

もう少し、やらせてみよう。

工場長 しかし、この不景気に慈善事業なんかしてたら、会社は倒産してしまいますよ。やはり、県外の安い繭を仕入れては？

親方、窓から外を眺めながら。

親方 君は、この信州でどの位の農家が、蚕を飼っていると思っ。

工場長 えっ、ああ、そりゃ、殆どの農家が。

親方 君の家でもか？

工場長 はい。私も小さいころから、蚕と一緒に暮らしていました。

親方 ははは、そうだろうな。きつと、この工場にいる、工女さんたちの家でも蚕を飼ってるだろうな。

工場長 ・・・そつだと思えます。

親方 しかし、この辺の製糸工場は、繭を地元からは買わない。殆どが県外の繭ばかりだ。

工場長 繭の質もいいし、値も安いですからね。

親方 それでいいのかな。

工場長 えっ？

親方 このままじゃ、地元の養蚕農家は県外の繭に負けっぱなしだ。

工場長 それはそうですが。

親方 農家と製糸会社が協力して、いい繭を作れるようになったら、面白
いじゃないか。

工場長 協力ですか？

親方 そうすれば、農家の実入りも良くなるし、いい糸も作れる。

工場長 ……。

親方 この街の、糸を取る技術と生産量は今や世界一のシルク王国だ。
でもな、シルクを求める人間はこの街には少ない。

工場長 ……そうですね。

親方 この街が、生糸を作るだけの街ではなく、生糸を愛する街になっ
たら、きつと何百年も何千年も絶えることはないだろうね。

工場長 生糸を愛する街…いいですね。

親方 さあ、もう一杯。

工場長 はい。

転換

二幕四場「繭をもとめて」

馬のひづめの音。遠くで汽車の汽笛。子供たちの遊ぶ声も聞える。

荷車を押して行く百姓。遊んでいる子供。人々の行き交う風景。

(イメージは長地あたり)

浅倉、お里、アキが農家に繭を分けてもらうよう頼んでいる。

アキ　そこを・・・お願いします。

浅倉　お願いしますよ源三さん。少しでいいんだ。ヤマネに繭を譲^{ゆづ}ってくれよ。

アキ　お願いします。

源三は行ってしまったようだ。

浅倉　話だけでも聞いてくれ。

アキ　源三さん！

お里　ここもダメか。

ため息をつく浅倉とアキ。何故かお里は変装をしている。

アキ　はあ、お百姓さんはみんな地主さんが怖いみたいですね。

お里　・・・意地悪されてるのよ。

アキ　お里さん、その格好、怪しくないですか？

お里　そう？

アキ　それにこそこそして。

お里　気にしない、気にしない。

浅倉　悪いな、せつかくの休みに・・・。

お里　・・・えっ。そんな、わたし少しでもお手伝いになればって。

浅倉　えっ？

お里　この辺は、わたしの庭みたいなもんだから・・・。(照れてる)
それには気づかず。

浅倉　しかし、地主さんはどうして・・・。

お里　・・・ああ、あの人は、製糸工場が嫌いなんだ。

浅倉　えっ？

お里　世間じゃ、糸取りのムスメを女工なんて言っけど、この岡谷じゃそう

呼ばない。女工！じゃなくて工女さん。

アキ　工女さん・・・あたしもそう呼ばれてます。

浅倉　工員を大事にしてるって証拠だ。

お里 だけど、あいつは「女工、女工」って見下して。

アキ ひどいですね。

お里 あっ、いいこと教えてやるつか。本当に腕のいい工女さんは工場なんかにいないんだ。

アキ どういうこと？

お里 工場に勤められるのは、長くても二十五歳から三十歳くらいまでだからね。みんな結婚して工場を辞めるだろ。そしたら今度は、家で糸を取るんだよ。

アキ 家で内職ですか？

お里 「出し釜」っていうんだ。岡谷の生糸を根っこで支えているんだよ。なにしろ腕は一流だからね。

アキ なるほど。

お里 ヤマネ製糸だって最初はそうだったんだけどね。

アキ えっヤマネが？

お里 おかみさんは、片倉の一等工女だったんだ。親方もその検査さん。

浅倉 へえ。

お里 だから、岡谷のおばさんたちをなめちゃいけないよ。技術は大きな工場にだって負けてないからね。

アキ すごい！

お里 その街中の家に繭を配っているのが、あの人の仕事だ。

浅倉 ……そりゃ大変な仕事だ。

お里 大変なもんですか。あの人はお金が好きなだけ。あの「業つくばり」繭の値をつり上げるのが趣味なんだ。

浅倉・アキ へえ。

お里 だからね、町の糸挽きからは嫌われて……。

浅倉・アキ ……。

お里 あの人はね、そういう人なの。

お里をじっと見つめる、浅倉とアキ。

お里 なによ！

浅倉・アキ いえ。

その時、養蚕農家の文太とよし。

文太 おっ！今日は休みか？

お里 ああ、文太さん。はっ……。（中途半端な変装する）

文太 家出ムスメ。頑張ってるだか？

お里 ぶ……。 （慌てる）

浅倉・アキ 家出ムスメ？

よし 大丈夫、ヤマネにいることあ地主さんには（内緒）これだでな。

お里 ……何のことだか。

文太 ほれで、おめえとうは何の用だ。

浅倉 繭を少しでも分けてもらおうと……。

よし ほづ。お里ちゃんも一緒に。

お里 ……まあ。

文太 そうか……精が出るな。

よし そうだ、一番繭が出来ただよ。

アキ えっ？

浅倉 ほんとうかい！

よし 浅倉さん、あんたに見せたかっただ。ちょっと待ってる。

浅倉 おお。

よし、あわてて、奥へ。

アキ 一番繭って浅倉さんが農家に配ったやつですよ。

文太 ああ、繭はな。少しづつ日をずらして育てるだ。そうすりゃ無理なく出荷できるさ。

よし、小さな袋を持って来て。

よし これだよ。

一同、繭を手にとつて見て。

浅倉 これは立派な繭だ。

文太 そうずら。あんたの持ってきた種はすげえよ。

アキ 大きさが違いますね。

よし 一代交配種って言ったつけ、こりゃ、いいよ。浅倉さん。

文太 おらあ、こんなでつけえ繭、初めて作っただ。

浅倉 いいや、養蚕の技術がなきゃあ、ここまでには……。

お里、繭を空にかざして。

お里 ……きれいな繭。

文太、お里の様子を懐かしそつに見て。

文太 はは。やっぱ変わらねえな。

お里 えっ？

よし ……お里ちゃんは、昔からそう言ってくれた。

お里 えっ、そう？

文太 ああ、ちつちえ頃から、おらぁんここによく遊びに来てな。繭を見
ちゃあ「きれいな繭だな」って。おらぁうれしかった。

お里 文太さん……。

文太 一粒一粒、丹精込めた繭だぞな。

お里 うん。

よし そんな気持ちよおわかってくれるのは、お里ちゃんだけだ。

文太 それに引き換え地主さんは……。

よし 昔はあんな人じゃなかったになあ。

文太 ああ、よくお里ちゃんと仲良く手をつないで来たもんだ。

お里 えっ！

アキ えっ？なんで地主さんとお里さんが手をつないで？

よし だって、

文太 親子だもんな。

問

文太 何かまずいこと言ったかな。

よし あんた、そろそろ仕事が……。

文太 そうだな。じゃあな、お里ちゃん。

文太とよし、去る。

アキ お里さん。

お里 ……何。

アキ いい話ですね。

お里 そっそっ。

アキ お里さんが、繭に詳しい訳がわかりました。

お里 あたし……ごめんなさい。

浅倉 えっ？

お里 浅倉さんを困らせているのは……うちのバカ親父なんです。

浅倉 らしいね。

お里 本当に、ごめんなさい。

問

浅倉 お里さんのせいじゃないよ。

お里 でも……。

浅倉 君のお父さんを、いや、農家の人たちの立場をもっと理解しなくちゃ

いけなかった。

お里 えっ？

浅倉 俺は、沢山の人に・・・迷惑をかけた。

間

お里 今の浅倉さんでいいよ。

浅倉 えっ？

お里 浅倉さんは、間違ったことしてないよ。

浅倉 ……。

お里 私、浅倉さんのこと応援する。

お里、さっきの繭を見つめて。

お里 一粒一粒、丹精込めた繭。文太さん、あんなに喜んで。

浅倉 ああ。

お里 この繭は、絶対ヤマネが引き受けなくちゃいけない。そうでしょ。

浅倉 ……ああ、絶対にだ。

アキ、腕の飾りひもを見ながら。

アキ やっぱり天王森の神様はすごいや。

浅倉・お里 えっ？

アキ 何でもない。早く行こう。

浅倉・お里 ……。

転換

「一幕五場「浅倉の過去」

ステージング。警官、村人、工女さんらが、元気よく歌い踊ってる。

タイトル「ここで生まれた仲間」

大地とボボして 生まれた子供だ

我らは土から 生まれた仲間だ

赤道 ふんころがしが

地球を回す くるくる回す

眠らぬように みんなで叫べ

村人と工女さんは去る。警部、巡査、地主が残る。

警部 いたいた！地主殿！

地主 警部さん。

警部 探しましたぞ。

地主 えっ？

警部 わかったのですよ！娘さんの居場所と、誘拐犯が。

地主 犯人？！じゃあ、娘は本当に誘拐を・・・。

巡査 タレコミがあつたんですよ。こつちへ来い。

お祭りで暴れていた酔っ払い。

地主 ……娘を知ってるのか？

アニキ 林サト。お里ちゃんって呼ばれてるでしょ。

地主 そつだ！

コブン 浅倉っていう乱暴者と一緒に居るところを見たんでさあ。

警部 どの組のもんだ！

アニキ 組？いやいや、ヤマネ製系の検番です。

地主 ヤ、ヤマネ製系の浅倉？！

警部 面識めんしきが？

地主 わしの土地の百姓をそそのかしている男だ！

警部 なにっ！

地主 あの野郎。どうも虫が好かねえと思つていたんだ。そつが！人の娘を人質ひんしちにしてつて訳か！

警部 で、ナニモンだ、その浅倉つてヤツは。

アニキ あの野郎、今じゃカタギですが、とんでもねえ野郎ですよ。

コブン わたしらもビックリしたんですがね。ヤツは、ヤマネ製系に居られ

る身分じゃねえんで。

警部 何だよ。ワクワクするような展開だな。

アニキ 二年前ですよ。横浜の、小口商店つてところで糸の商人をしていたんですけどね。

コブン 野郎。ピンハネしたんで。

一同 ピンハネ！

アニキ それが驚いちゃいけませんよ。今いるヤマネ製糸から、騙しとったんですよ。

コブン 百円ですよ。百円。

巡查 家が建っちゃいますね。

警部 何ということ！ヤマネはそんな男を使っているのか！

地主 くそお！わしの娘を誘拐するとは。

警部 まあまあ、地主殿。落ち着いてください。そのような男、我々も許しがたい。必ず、正義の鉄槌を下しましょう！正義の獅子の名に賭けて！

ほら目をふく巡查。まるで警部の出陣だ。

警部 お里さんを悪党からとりもどすぞ！

巡查 参りましょう。警部殿。

地主

浅倉信太郎……もう勘弁ならねえ。

転換

二幕六場 「不況」

工場内、親方とおかみさんを囲んで従業員が文句を言っている。
マスエは赤ん坊（キューピー）をおんぶ。

親方 いやいや、ただの生産調整だ。工場は一週間だけ閉鎖するだけで、
倒産したわけじゃないんだよ。

おかみ その代わり、朝昼晩の食事も用意するし、幾らか保証もできるから
ね。

いち ほれじゃ困るだつてば。

キク 一週間たてば、仕事が入って来るだか！

うめ ほうだ、糸の値段が上がるだか！

ハル こりゃ、内職ないしやくでもしなきゃやってけんわ！

親方 どこの会社も糸をとるのを控えていてな、繭をしっかりと抱え込んで
る。うちみたいな小さな会社に繭がまわって来ないんだ。

よね 農家から繭を分けてもらえばいいいらに。

キク ほうだ、今までだつて、お百姓さんから買ってたじゃねえか。

工場長 それが、今、ちょっともめ事があつてね。

ざわつく工女たち。

田中 なあ、浅倉。

浅倉 ……すみません。

気持ちよさそうな田中。浅倉、責任を感じている。心配するお里と
アキ。

田中 だいたい、お前が来てから、会社がこんなになつたんだ！

浅倉 ……

田中 繭にかかった種代、薬品代。桑の葉の肥料代。請求書は山積みなん
だぞ。

工場長 まあまあ、こういう事は時間がかかるんだ。

田中 えっ？

マスエの赤ん坊が泣く。親方が来て赤ん坊をあやす。

マスエ あつすいません。おおよしよし。

親方 （赤ちゃんをあやす）アバババ。

田中 親方！

親方 あ？

田中 ……もういいです。

うめ なんて地元の繭が買えなくなっただけ？

ハル 地主さんが怒ってるだと。

キク がめついヤツだなあ。

マスエ だいたい、地主さんの仕事すら、この辺の繭をよくするのは。

いち ほうだよ。自分とこの百姓つかって、お蚕さま飼ってるだてな。

工場長 なあ、よね達は平野村の人だから、地主さんと話してきねえのか？

一同 うん。

うめ ほうだ！地主さんに、おらとくれえの娘がいたな。

親方 えっ！

お里 (ドキッ)

おかみ そうだったかね。

よね いたいた、なんつったかな？

いち 東京の女学校いっただぞ。

うめ お嬢様だてな。

ハル じゃあ、平野村にはいねえか。

よね おつかあが、こっちへ帰って来たって言うてたが。

工女達 へえ。

お里 へええ！

キク どうせ、ひらひらの洋服着て、偉そうにしてるら。

マスエ 東京帰りじゃあな。お蚕さまのことも知らねえらな。

ハル それじゃあ、嫁の貰い手もねえや。

うめ ほんとだ。

一同 ははは。

お里 ああああ？(何だと！)

一同 えっ？

アキ お里さん！(お里をなだめる)

工女たち、お里が何で不機嫌なのかわからない。

おかみ あんた、いつまで内緒にしてるつもりだい？

親方 その内、話すよ。

お里、引きつっている。アキがお里に内緒話し。

アキ お里さん、東京帰りだと嫁の貰い手がないんですか？

お里 田舎じゃそうなんじゃないの。

アキ、浅倉の元へ。

アキ 浅倉さん。

浅倉 ん？

アキ お里さんを嫁に貰ってください。

浅倉 ああ……（気づいて）えっ！

一同 えっ！

アキ 嫌ですか？

浅倉 いや……。

お里 嫌？

浅倉 いや、その嫌じゃなくて……。

お里 じゃあ、どんな嫌なの！あたしだってねえ選ぶ権利ってもんが、

浅倉 だから、その嫌じゃ……そんなことより繭をどうするかだろ。

お里 ああ、そうそう。繭をどうするかよ。

一同の視線を受けて。

三助 いやだなあ。おおっぴらに……。

マスエ ねえ。

アキ ねえ。

何だか、やる気を失ってしまつ工員たち。

田中 じゃあ一週間、工場を閉鎖するってことで。

よね ……うちに帰って百姓でもするか。

うめ おらあどうすりゃいいかな。

田中 嫁もさがすかな。なあ。

よね おらあたちも。ムコでも探すか。なあ。

工女たち ああ。

工女たち、一人一人お里に「フンツ」しながら去ってゆく。

お里 えっ？

アキ 睨まれてますね。

そこに警部が飛び込んで来る。

警部 浅倉って男いるか！

アニキ あいつですよ。

コブン あの、ちょっと見いい男が浅倉です。

警部 うん、ますます許せん。

出て行った工女たちも、警部の勢いに押されもどつてくる。もう何が何だかわからないくらいモミクチャ騒ぎだ。

親方 ちよつと君たち！

おかみ あんたたち、何なんだい急に。

その後ろから入つて来た地主。お里を見つけると。

地主 お里！

お里 お父さん。

一同 お父さん？

地主 腕は？足は？よかつた無事なんだな。

お里 何言つてんの？

浅倉 えっ！

地主、近くにいた浅倉を見つけると。

地主 あ・さ・く・らゝ

浅倉 何ですか。

地主 人の娘を、人の娘を！

マスエ お里さんつて。地主さんの娘？

お里 そう、残念ながら。

一同 へえ。・・・えっ！

警部 地主どの、まずは娘御が無事でなにより。

地主 警部さんのおかげです。ありがとうございます。

警部 よし！浅倉信太郎を逮捕しろ！

警官達 はい！

一同 はっ？

警官隊、浅倉を縛り上げる。

親方 あの、お話が良くわかりませんが。

警部 おほん。誘拐とピンハネの罪で浅倉を逮捕するんだ。

一同 へえ。

親方 また、いろいろと並びましたな。

おかみ 何かの間違いですよ。

それにはお構いなしのお里と地主。全員を巻き込みながら、押しつ引きつの大騒ぎ。

お里 何しにきたのよ。いきなり！

地主 お前を助けにだ！

お里 助けに？なんで？

地主 この男は悪党なんだぞ！

お里 悪党？悪党はお父さんでしょ！

地主 なに？

お里 何で、ヤマネに繭を入れてくれないの！

地主 こいつが百姓連中に悪知恵を吹き込んでるからだ。

お里 バカじゃないの？

地主 なんだ、その口の聞き方は！今まで誰のおかげで、何の不自由もなく生きて来れたと思ってるんだ！

お里 こういう時だけ親ヅラしないでくれる！

地主 なに？

お里 何よ！わからずや。

地主 何だと、この跳ねっ返りが！

警部 うるさい！

警部、もみくちゃの中、何とかお里と地主の間に割って入る。

警部 親子喧嘩してる場合か！

巡查 警部落ち着いてください。

親方 で？浅倉がなにか？

警部 何かじゃない！何度言えばわかるんだ！

巡查 この男はお前の会社の金をピンハネし、あわよくばと、この会社に

近づいた。そして、地主の娘まで誘拐し、従僕な農民をたぶらかし

ていたんです。

親方 また、いろいろと並びましたな。

おかみ 何かの間違いですよ。

警部 間違いじゃない！おまえらワザと言ってるだろ！

全員息を切らしながら、何とか落ち着く。

お里 ちょっとどうして私が誘拐なの？

警部 親方。それと美しい娘さん。事情を聞きたいのでご同行願いますよ。

親方 えっ？私も？

お里 何であたしが！

警部 まったく聞きしに勝る美人。こんな見せ物小屋みたいな所にあなた

は似合いません。おい、連れて行け。

警官隊 はい。

警部 ああ、一つ言っておかなぎやならん。わたしの様な優秀な警察官の

おかげで、無事ことなきを得たなどと、新聞各紙に騒ぎ立てないで
くださいな。お願いしますよ。

巡査 お願いしますよ！

一同 わかりました。絶対にいいません。

口にチャック。

警部 ……お前ら、逮捕されたいのか。

巡査 警部。(なだめて)

三助 いったいどうなったんだ？

アキ 浅倉さんが何かしたの？

マスエ 誘拐とかピンハネとか……。

巡査 さあ、邪魔だ。道をあけて。

おかみ あんた。

親方 心配するな。話せばわかる。

地主 親方さん。こんなことになっちゃ、この会社も終りですな。

親方 ……。

おかみ 困るよ、こんな時に親方が居なくなっちゃ。

お里 浅倉さん！

警察が親方、浅倉を連れて去る。

お里 どういうこと？

地主 ずいぶん、心配したんだぞ。

お里 はっ？

地主 さっ行こう。

お里 浅倉さんはね、新しい繭を作ろうとしてるの。

地主 えっ？

お里 もう今までのやり方じゃダメなのよ。

地主 ……お里。

お里、文太からもらった繭を出して。

お里 これを見て。

地主 ……ただの繭だろう。

お里 良く見て。粒が大きくて、糸も太いの。

地主 ははは、シナ種か。これは病気に弱いんだ。

お里 日本種とシナ種の掛け合わせだって。一代交配種^{よちあひしゅ}っていつの。

地主 一代、交配？あの男が配っていた爾か……。

お里 これだったら、いい糸が取れる。

地主 お里……。

お里 浅倉さんは、それをやろうとしてるの。

地主 いい糸は女工が取るもんだよ。

アキ 工女さんです。

地主 えっ？

アキの言葉に驚く地主。

お里 糸取りの技術だけじゃダメ。繭の質がよくならなくちゃダメなのよ。

地主 ……何を言ってるんだ？

お里 お百姓さんと製糸工場が力を合せないと、いい生糸はできない。

地主 ……。

お里 お父さんの協力が必要なのよ。

地主 お里……。

お里、浅倉を思い出し、我に帰って。

お里 ……浅倉さんに何をしたの？

地主 いや、それが……。

お里 浅倉さん！

お里、浅倉の後を追う。その時、

三助 あれ？工場がゆれてる。

はじめゆらゆらしていたが、ガタンと大きな揺れが辺りを襲う。

地主 地震？

みるみるうちに大きな揺れは音をたてて一同を揺らす。

三助 危ない！外に出よう。

マスエ きゃー……！

皆、その場にしゃがみ込んでしまう。

その内、揺れも治まって。

その時「ガッシャン」と大きな音。

地主 おい、今、何か倒れるような音がしなかったか。
圭吉 庭の方ですね。

入り口から、浅倉が警部を担いでやって来る。

浅倉 ……誰が医者を呼んでくれないか。

お里 浅倉さん！

その後から巡查。浅倉、警部とそつと床に降ろす。

巡查 警部！

圭吉 親方！

親方 ……エントツが倒れた。

一同 えっ！

力尽きて倒れる浅倉。

お里 浅倉さん！浅倉さん！

おかみ あんた。

親方 わたしは大丈夫だ。早く医者を！

転換

あちこちで大騒ぎの声、そして半鐘を鳴らす音。そこに老婆。

老婆

大正十二年九月一日、お昼時分だったと思います。関東におこった大地震でした。この岡谷でも、けっこう揺れましたね。これはあまり知られてはいませんが、「諏訪千本」といわれた、製糸工場のエントツが殆ど倒れてしまったくらいです。岡谷のエントツは、鉄板エントツでしたからね。

そこに、ボイラー屋の大将。

大将

親方。エントツがたおれちゃったの、俺が建てるからよ。これは何がなんでも俺がやらなきゃな。・・・いや、ヤマネには、返しきれねえ恩があるからよ。心配すんな。さあ、始めるぞ。

従業員たち へい！

老婆

あの、火事をだした、ボイラー屋の大将です。エントツがころんだって日に、どやどやと7人ばかり部下を連れて来て修理に取りかかってくれました。

そこに工場長、田中、工女たち。

工場長

はい、大丈夫です。ええ、被害にはあいましたが、出荷はできます。はい、わかりました。

三助

また、注文受けちゃったんですか？

工場長

あたりまえだ。断ってる場合じゃない。

マスエ

でも、工場動かないんですよ。

一同

うん。

工場長

だったら、ボイラーが直る前に、木枠の調整でもしておけ。

一同

はっはい。

そこに電話。

工場長

はい。ヤマネ製糸です。はい、大丈夫です。やりますよ！

老婆

急に注文が入りましたのも、実は訳がありました。当時、私たちにわかりませんでした。関東の殆どの製糸工場と、生糸や繭の倉庫が大変な被害にあったんです。注文で朝から晩まで電話が鳴りっぱなしでした。ところが・・・。

静かな工場。

老婆 糸は取りたくても繭はなし。この時はどうしたらいいのか、途方に

暮れるばかりでしたな。泣く泣く、注文はことわりました。そして、

一人、また一人。工場を去って行きました。

鳴り止まない電話。しかし、もう誰もその電話を取る者はいない。

途方に暮れる親方とおかみさん。アキが床掃除をしている。

おかみ 電話。出なくていいかねえ。

親方 注文が入っても、糸がとれねえんじやしょうがない。

おかみ そうだね。

電話が鳴り止む。

おかみ これからどうするかね。

親方 湖畔の山十製糸は横浜の倉庫に大量の生糸を預けていたそうだ。

おかみ えっ・・・それじゃあ。

親方 噂だと、みんな燃えちまったって・・・。

おかみ ……燃えちまった？どうなるんだい？

親方 さあな。保証してくれるかどうか。

おかみ えらい痛手だね。

親方 それに、この辺の工場はほとんど貿易用の糸を生産してるからな。

横浜が壊滅状態じゃ、糸を持つてくともねえ。

おかみ 横浜がなくなっちまったたら、岡谷は、いったい、どうなっちまっ

だい。

その時、蒸気のもれる音。木杵がカラカラと回りだす。

親方 おっ、蒸気が入ったな。

おかみ ああ。

そこに、ボイラー屋の大将。7人くらいの従業員。

大将 親方。

親方 どうだい。

大将 エントツが立ったよ。もう大丈夫だ。

親方 悪かったな。

大将 今、ボイラーに火を入れてるが、すまねえ。別の工場にも呼ばれて

るんで、これで行かなきゃならねえ。

親方 ありがとう。後はやっておくよ。

大将 すまん。

人気のない工場。

大将 親方、工女さんの姿が見えねえが。

親方 しばらく工場は閉鎖だ。町中このありさまだ。仕事にならんからな。

大将 親方、踏ん張りどこだよ。

親方 ああ。

大将 困ったことがあったら、言ってくれ。すぐにかける。

親方 ……ありがとう。

大将 おい、おめえら行くぞ。

従業員 へい。

エントツ屋去る。それに深々と頭を下げる二人。

おかみ どこよりも早くエントツが直るなんて、あんたの行いの良さだ。

親方 ありがてえこつた。だけどなあ……。

カラカラと虚しくまわる木杵。糸を取る者は誰もいない。

おかみ もともと二人で始めた工場だ。

親方 えっ。

おかみ 一から出なおそうかね。

親方、おかみさんをまじまじと見て。

親方 そうだな。

アキ、親方に近寄る。

アキ 親方さん。

親方 心配いらねえよ。それより、アキちゃんも街へ出て気晴らしでもして来たらどうだい？

アキ でも……どこも人でいっぱい。

親方 そうか、あちこち工場は止ってるからなあ。

アキ なんだかお祭り騒ぎです。

親方 みんな若いんだ。そうでもしてなきゃ気がおさまらねえだろう。

アキ 親方さん、あの……浅倉さんは……。

その時、お里が駆け込んでくる。

お里 親方！おかみさん……。

親方 お里。

おかみ お里さん。

お里、アキを見つけて。

お里 ……アキちゃん。

アキ お里さん。

お里とアキ抱き合う。

お里 ごめんね。寂しい思いをさせたね。

アキ お里さん、また、一緒に働けるの？

お里 ああ。また、一緒だ。

アキ 良かった！

お里、工場の辺りを伺って。

お里 親方、浅倉さんは……。

親方 ああ……。

お里 まさか、警察に？

親方 いや、それはもう話しが付いたよ。

お里 本当なんですか？浅倉さんがヤマネに迷惑をかけたって……。

親方 実は浅倉くんは……。

おかみ あんた！

親方 いや、話そう。このままじゃお里だって納得しないだろう。

お里 聞かせてください。

親方、意を決して。

親方 浅倉くんが、横浜の小口商店で、ウチの売り上げを懐に入れてしまっ

たのは本当だ。

お里 えっ、それじゃあ……。

おかみ でも、理由があつてね。

お里 理由？

親方 彼のお母さんが大病をわずらってね。どうしても、お金が欲しかったそうさ。

お里 お母さんが？

親方 手術したそうだよ。

お里 お金は手術代に……。

親方 そうらしい。

親方 律義な男だよ。警察に出頭する前に、一言わびを入れたいと、この

岡谷にやって来たんだ。

おかみ 百円はうちにとつても痛手だったからね。顔見た時には、焼き殺し

てやりたいと思つたよ。そしたら親方がね……。

親方 雇つたんだよ。少しづつ返してもらおう約束でね。

おかみ 小口商店じゃ驚いてたね。人が良すぎるつて。

親方 ああ。

お里 ……親方。

おかみ でもね、お金は、今年の春にすべて返して貰つたよ。

お里 本当ですか！百円でしよう？大金ですよ。

親方 ああ。爪の先に火を灯すようにね。

お里 この2年ほどで……百円を。

お里 それで、お母さまは……。

おかみ お元氣になられたようだよ。でも、今度の震災でどうなったか。

お里 ……そうなんですか。

親方、お里を見て。

親方 ……浅倉くんは横浜に帰つたよ。

お里 ……。

浅倉と親方のフィードバック。浅倉は包帯で腕を吊り、頭の包帯も痛々しい。

何を言ってるんですか親方！

親方 君は責任を果たした。もう、会社に義理はないだろう。

浅倉 とんでもねえ。こんな状況でそんなことは……。

そんな心配はいらんよ。それは私が何とかすることだ。今はお袋さんの安否を心配しなさい。

浅倉 しかし、親方！

おかみ たつた一人のお袋さんだろう。

でも、このままじゃ会社は……。……俺は、またみんなを裏切ることに……。

肩を落とし震える浅倉に。

親方 実は、私にも息子が一人いてね。

浅倉 えっ？

おかみ 流行病で亡くしちゃった。

浅倉 ……そうだったんですか。

親方 その時、工場の経営にやっきになっていてね。十分にみてやること
ができなかった。

おかみ 後悔してるんだよ。あたしも、親方も。

親方 だから、浅倉くん。横浜に帰るんだ。心配事をほっておいちゃいけ
ないよ。事が身内のことならなおさらだ。

浅倉泣いている。

浅倉 親方……このご恩は、一生忘れません。

浅倉、去る。フィードバック終って。

お里、若草色の飾りひもを見つめて。

アキ それ、浅倉さんの飾りひも。

お里 とつとつあげられなかった。せつかく作ったのにな。

アキ お里さん……。

お里、泣いている。

親方 すまん、お里。

お里 ……。

その後ろから地主。荷車を引いて来る。

地主 ……親方。

親方 地主さん、なんて言ったらいいか。

地主 そりゃ、こっちのセリフだ。

親方 えっ？

地主 親方すまねえ。

地主、突然土下座をして。

親方 おい。何のまねだ！

地主 親方！・・・わしらは今まで自分たちの利益ばかり考えて来た。そ

れはなあ、誰も、わしらを守ってくれなかったからだ。どんなに苦
勞してもな。風向きが変わるとわしらは見捨てられた。だから、誰
の言葉も信じなかった。そうじゃなきゃ生きて行かれん。

親方 手を上げてください、地主さん。

地主 ……。

親方 製糸工場だって同じですよ。繭の相場と生糸の相場に振り回されて、
毎日が綱渡りだ。ちよつと気を抜きゃあ、明日にでも夜逃げだ。

地主 ……親方。

親方 でもね、地主さん。うちは製糸場だ。騙されようが、損を出そうが、
糸は取らなきゃならねえ。取り続けなくちゃなんねえ。それがね。

明治から続いた、この土地の宿命なんだ。

地主 ああ。

親方 だからよ。協力してやんねえか。岡谷一の、いや、日本一の生糸を
作ってみねえか。それしかねえじゃねえか。

地主 ……ああ。

親方 地主さん。

地主 とりあえず、これだけ持って来た。輸出用じゃあ無理かもしれねえ
が、良い繭だよ。

親方、袋を開けて繭を見る。

親方 こりゃあいい。粒も揃ってる。こりゃあ良い繭だよ地主さん。

地主、立ち上がって。

地主 いや、まいったまいった。わしは、目が覚めました。この、お転婆

な娘をこんなに立派にしてもらって。

お里 ……お父さん。

地主 これからは、娘同様。わしらのこともよろしくお願いします。

親方 本当ですか。

地主 まったくこの会社は、何をしでかすかわからねえ。いい糸を作る

うじゃねえか。なあ、親方。

親方 ありがとございます。おい、圭吉、三助。

圭吉・三助 へい！

圭吉と三助、現われる。

親方 糸をとるぞ。繭を煮てくれるか。

圭吉・三助 へい！

圭吉と三助、荷車を輿へ運んで行く。

アキ　でも親方さん、糸を取る姉さんたちがいませんよ。

そこにおかみさん。

おかみ　何を言ってるんだい。お里にアキ、それに私がいるじゃないか。

アキ　おかみさん？

おかみ　こうみえても、元は一等工女なんだよ。

親方　昔はな。

おかみ　見損なつんじゃないよ。腕はなまっちゃんないよ。

親方　しかし、三人じゃなあ。

地主　ははは、親方。ここの糸挽きたちを、みくびっちゃんいけませんよ。

親方　えっ？

地主　誰も、この会社を見捨てちゃいません。

その時、文太たち飛び込んで来る。

文太　地主さん！

そこによし、そして工女の姿。田中が荷車で繭を運んでくる。

文太　繭、運んできたぞ。

よし　見てくれこの繭。こりや上等だよ。

おかみ　あんたたち、家に帰ったんじゃないのかい？

よね　そんなことしませんよ。

キク　きつちり働かせてもらいますよ。

いち　だっておかみさん良く言ってるじゃないですか。私たちは娘みたい

なもんだって。

マスエ　娘に気なんか使わないでくださいよ。

親方　おめえたち……。

うめ　エントツも直ったみてえだし。

ハル　繭もそろった。

そこに、工場長。圭吉と三助が申し訳なさそうにやってくる。

工場長　さあ、それじゃあ、働いてもらうぞ。

おかみ　工場長！あんた、いつの間に。

工場長　すいません。繭を集めるのに手間取りました。

親方 それじゃあ、おめえ。

地主 わたしが頼んだんだ。諏訪中の繭をかき集めて来いって。

親方 そうでしたか。

工場長 でも、親方。

親方 ん？

工場長 まだ、早すぎますよ。こいつらに繭を煮させるなんて。

親方 えっ？

圭吉と三助。頭をさげて。

圭吉 いつも通りやろうと思ったんですが。

三助 それじゃあ、煮方が足りねえって怒られました。

工場長 あたりめえだ。繭の大きさを見ろ！同じやり方じゃあ、若煮になっ

ちまっ。

圭吉・三助 すいません。

地主、繭を手にとって見る。

地主 これが、諏訪で出来た繭だ。

お里 どれも粒がそろってキラキラしてる。今までにこんな繭見た事ある？

文太 諏訪の百姓が作ったんだよ。

よし 自分の畑で取れた桑の葉をムシャムシャ食って育ったお蚕さまだ。

工場長 こんな立派な繭が・・・諏訪で作れるんですね。

親方、全員が工場にもどって来たのを確認すると。

親方 おめえたち・・・

親方泣いている。

親方 おめえたちは、ばかやろっだ。もっとでかい会社に行きゃあ、給金

もいっだぞ。

ハル おらぁここがいいだ。

よね ああ、ここがおらぁとつ居場所だでな。

親方 それに、仕事にあぶれることあねえんだぞ。

いち そんな時やそんな時だ。

マスエ それでも、おらぁとつは親方と糸を取りてえだ。なっ。

一同 うん。

工場長 親方、日本一の糸、取りましよう。

それぞれ「親方」と声をかける。

親方 ……それじゃあダメだ。

一同 えっ？

親方 天下一の糸を…取らにゃあな。

その意味を察して、皆の顔が高揚する。

一同 はい。

親方、凜とした姿で。

親方 工場長！

工場長 はい。

親方 断った糸の注文、全部受けて来い。

工場長、嬉しそうに。

工場長 はい！

工場長ハケル

親方 田中！途中で糸の切れるような煮繭をするな、熱めの湯でじっくり

煮るんだ。いいな。

田中 はい！

田中ハケル

親方 三助！ボイラーの火を絶やすんじゃねえぞ。

三助 へい！

三助ハケル

親方 圭吉。漬れた繭は取り除け。繭の粒を均等にして配ってくれ。

圭吉 へい、親方。

圭吉、アキと目があう。嬉しそう。圭吉ハケル。

親方 いいか、欲かいて、糸をたくさん取ろうなんて思うなよ。俺たちは

糸を取る機械じゃねえ。蚕の糸を上手に紡ぎ出す職人だ。懸命に繭を作ってくれた養蚕農家をがっかりさせんじゃねえぞ！

一同 はい。

地主 ……親方。

文太 ……。

親方 さあ、仕事だ！蒸気は送られている。釜の温度に気をつける。

工女たち はい。

地主 こりや繭が足りねえな。文太、もうひとつ走り行ってくるか。

文太 へい。

よし 忙しくなるね。

地主と文太、よしハケル。工場長もどって来て。

工場長 親方、注文です。

親方 こりやまた、大量だな。

お里 糸の太さは？

親方 一番と二番は三十デニール。三番四番五番は四十デニール。

アキ こっちはどうしますか！

親方 十四中デニール。

アキ 輸出用ですか？

親方 ああ、ただし、糸はしばらく蔵にお預けだ。横浜の回復を待つ。

工場長 なるほど。

お里 ほら、アキ。

アキ えっ？

よね あんたは、最後まで工場に残ったんだ。

ハル 仕切りは任せるよ。

アキ でも…。

工女たち ほら。

アキ ……はい。

アキ、胸を張って。

アキ フシコキの確認をして。いいかい、コマを替えて一番小さいコマだ

よ。十四中デニールは輸出用の糸だ。糸の太さを均等に。フシなん

か作ったらしょうちしないよ。さあ、はじめるよ。

工女たち はい。

親方とおかみ、嬉しそう。

おかみ 頼もしくなったね。

親方 ああ、岡谷の工女さんだ。

圭吉と三助が、煮た繭を桶に入れて台車で運んで来る。

工場長 繭配り！繭を切らすなよ。

圭吉・三助 はい！

ゴウゴウと唸りを上げる繰糸機。

製糸場が息を吹き返す。お里、身を引き締める。

お里 さあ、今までの分を取り返すよ。この会社はね、沢山の人の力で動いているんだ。そのことを忘れんじやないよ。

一同 はい。

ステージングの二番

ごっしんげっぱの ぶんかにも

おくれはとらじ もろともこ

つとめて はげみて こっしんげっぱ
つくすぞ やがて くにのため

転換

エピソード

老婆

関東大震災は相模湾沖が震源地だったので、横浜の被害は大変なものでした。当時の輸出品の主力だったのは生系ですが、その生系の輸出が横浜では出来ないということで、神戸がその名乗りを上げるのですが、これがまた、もめましてね。

老婆

岡谷の製糸家は、横浜に義理をたてて、神戸には生系を持って行かなかったんです。諏訪人の気質なんでしょうね。明治、大正と横浜と岡谷は、切っても切れない関係でしたからね。この時、横浜と神戸の板挟みにあつて、たくさんの製糸工場が倒産に追い込まれしまつたんです。

老婆

震災からひと月ほど経ちましたでしょうか、横浜の貿易復興会が、港の貿易を取り戻すために、岡谷に糸の買い付けにまいりまして。その商人が誰であろう、あの浅倉さんでした。

汽車の汽笛。岡谷駅のホームに貨物列車。そこで、荷物の確認をしている浅倉。

浅倉

片倉五百梱、山一林組二百梱、山二製糸百五十梱、ヤマネ製糸、ヤマネ製糸の親方、おかみさん、アキ、工場長が浅倉を見守っている。

浅倉

ヤマネ製糸、二百五十梱。こんなに沢山。

アキ

死に物狂いで取りましたから。

親方

ひと月、ため込んだ甲斐があつたな。

アキ

はい。

浅倉

・・・ありがとうございます。

工場長

しかし、助かったよ。これ以上、糸をため込んでいたら、うちの工場もどうなったか。

おかみ

ありがとうございます。

親方

神戸じゃずいぶん買い叩かれたからな。

浅倉

せめてもの、ご恩返しです。

浅倉、振り返って。

浅倉

みなさん、本当にご迷惑をお掛けしました。

親方

なにを言っているんだ。誰もそんな風に思っちゃいないよ。

荷物の運び込みを手伝っていた警部、巡査、大将。

警部 浅倉、今度悪さをする時は、岡谷以外を狙ってくれ。

親方 えっ？

巡査 ここら辺の製糸家は、人が良すぎますからね。

浅倉 ご希望には添えませんが・・・それは本当です。

親方 警部どのは、ヤマネ製糸に多大な貢献をしたと、表彰されたそうだ。

警部 ……まったく理不尽な世の中だ。

大将 本当はうれしくせに。

警部 きさま、逮捕するぞ。

大将 勘弁してくださいよ。

一同 笑つ。

そこにお里の姿。ちよつとよそ行き。キレイにしているお里。それを嬉しそうに見つめる浅倉。

お里 浅倉さん、生糸をよろしくお願いします。

浅倉 ……おお。

お里に近寄る浅倉。

浅倉 とつても・・・綺麗だ。

お里 ……。

問

お里 横浜は地震で大変なことになっているんでしょう？

浅倉 ああ。

お里 早く立ち直ってくださいね。

浅倉 ……お里さん。

お里 私たちは、それを願っています。

一同、うなずく。

浅倉 ……。

問

親方 浅倉くん。こっちは大丈夫だから。

浅倉 はい。

おかみ これ、うちの味噌だよ。持ってきな。

浅倉 ありがとうございます。

浅倉、貨物列車の後部に乗り込んで。

浅倉 親方……。支え合う大切さを、学ばせて頂きました。

一同、笑顔になる。

お里 浅倉さん、お母さまは？

浅倉 大丈夫、心配いらねえよ。

お里、涙目で浅倉に近寄る。

お里 ……浅倉さん。

浅倉 祭り、楽しかったな。

お里 はい。

浅倉 また、行くこうか。

お里 えっ？

お里 約束ですよ。

浅倉 ……ああ。約束だ。

お里、お祭りで約束した「飾りひも」を取り出して握りしめる。

(若草色の飾り紐)それにまだ気づかない浅倉。

浅倉 アキちゃん。良い糸取りになるんだよ。

アキ はい。

浅倉、頭を下げる。泣いている。

汽笛が鳴ると、真っ白な煙とけたたましい蒸気の騒音。浅倉の姿が小さくなる。それを、手を振り見送る一同。

お里 浅倉さん！

お里、飾り紐を浅倉にかざす。

浅倉、それに気がついて手を差し伸べるが、すでに届かない。

浅倉とお里、最後まで見つめ合う。とつとつ汽車は行ってしまった。

飾り紐を胸に抱くお里。お里の気持ちを察する一同。

お里の肩にそつと手を置く親方。

親方 しばらく逢えないぞ。追っかけたらどうだ。

お里、気丈に涙を拭いて。

お里 いいんです。・・・天王森の神様がついてますから。

親方 えっ？

お里 親方は知らないんですか？天王森の神様は工女の味方なんですよ。

おかみ そうだよ。

アキ はい。

お里 だから・・・いつかはきっと。

親方、ニッコリ笑って。

親方 そうだな。

親方、皆の方に向き直って。

親方 さあ、工場にもどって、仕事に取りかかってくれ！岡谷の製糸工場

の底力を発揮するときだ。

一同 はい！

その時、工場長があわてて、親方の元に。

工場長 親方！大変ですよ。

親方 どうした？

工場長 これを見てください。（一枚の用紙）糸の値段が・・・。

親方 そんなに騒ぐな。赤字は覚悟の上だ。

工場長 違いますよ。その逆です。

親方 何？

用紙を見つめて絶句する親方。

工場長 親方・・・相場の二倍です。

親方 ああ。

工場長 親方！

親方 繭の品質改良を、本格的に始められるな。

工場長 はい！

親方、工場長の肩に手を置き、笑顔。ハケル。

老婆がそれを懐かしそうに見つめている。すべては老婆の記憶。老婆はそれを今に伝える語り部だ。岡谷の本当の姿を涙ながらに語ってくれた。語り終えてほっとしている老婆。その目は数々の苦難を乗り越えた自分の、そして、皆と共に過ごした激動の時代を垣間みている。

老婆
震災から三月ほど経ちましたでしょうか。横浜はバラックのようなものを立てまして、大変な思いをして生糸の貿易を守っていただきました。

老婆
それからもう一つ、製糸家が自家製の味噌を被災地にお送りしましたが、それが「信州の味噌はおいしい」と大変喜んでいただきましたね。その後、あちこちで、味噌工場ができるキツカケにもなりました。

アキが現われる。遙か遠くを見る。まるで老婆とシンクロするよう

老婆
あの「野麦峠」を何度越えたことでしょうね。その間、沢山の楽しい事、悲しい事、いろいろ体験しました。それでもそのすべてが、私たちにとっては、懐かしい思い出です。

老婆
激動を生きたわたしたちですが、岡谷の製糸工場は、わたしたちの希望。そして、工女の誇りです。

その時お里が現われて。

お里
アキちゃん。

老婆・アキ
はい。

顔を見合わせニコツと笑う老婆とアキ。

アキがお里の元へ行く。

それを見つめて微笑む老婆、鮎沢アキ。

エンディングスタート。

タイトル「工女のほまれ」

作詞 「吉田館社歌」より

作曲 「市川さつき」

編曲 「両角由香」

三部合唱

美しき国よ 信濃なる

諏訪の湖 いやひろく

花咲く春も 月の夜も

勤めいそしむ 若人の

日出ずる富士と 八ヶ嶺を

はるかに 遠く仰ぐところ

綾にたへなる 緞糸の

望みの光 愛の色

清き心を 指に込む

我らの幸は 工女のほまれ

我らの幸は 工女のほまれ

おわり。2009.10.3

平成21年 12月6日(日曜日)カノラホール大ホールに於て上演

岡谷市文化祭 第5回おかや演劇祭「絲まちパラダイス」

一回公演 集客数780人

蚕糸博物館の協力により、カノラホールロビーにて明治、大正の岡谷を撮影したフォトパネルを多数展示

監修 大橋泰彦(劇団離風霊船)

作 「おかや演劇祭実行委員会」

小林千冬

垣内博文

オオクラユキコ

榊原ウイリアン

有賀慎之助

河野さくら

資料 ふるさとの歴史 製糸業

岡谷蚕糸博物館紀要1巻から13巻

公報おかや 2008年6月号

おかや市政施行50周年記念 岡谷市勢要覧

故鮎沢常子さん手記(山上宮坂製糸)

幕末の信州(郷土出版社)

諏訪大紀行(一草社出版)

図説・諏訪の歴史(郷土出版)

大阪新聞 (大正6年)大正13年)

神戸新聞 (大正6年)大正13年)

協力

丸中宮坂製糸

宮坂照彦氏

山上宮坂製糸

宮坂秀子氏

吉田館

吉田貢氏

共栄工業株式会社(旧山一林組) 吉澤英三氏

株式会社豊島屋 林紀六氏

岡谷市蚕糸博物館

他